特 218
364

治農法

延吉 著

始

目次

序言……五
緒言……六
農民訓……一一
其一　はしがき……一二
其二　本義……一三
其三　むすび……一七
第一章　農業の本質……一八
第一項　自重……一八
第二項　働くことを知る……二五

昭和九年 帝國圖書館藏

第三項　理想信念に生きる……三一
第二章　農業の經營……四一
第一項　進取進歩……四八
第二項　共同協調……五一
第三項　獨立自營……五七
第三章　農民生活……六八
第一項　質實剛健……六九
第二項　感謝報恩……七四
第三項　向上……八一
第四章　海外進出……九〇
第五章　皇國農村の建設……九九
第一項　皇國農村の建設者……一〇一

第二項　皇國農村の資格……一〇三
第三項　資格の具現……一〇五
第六章　皇國農民の使命……一〇九
第一項　食糧の確保……一一〇
第二項　人的供給の源泉……一一三
第三項　日本精神涵養の所……一一五
第七章　結論……一二〇
附錄　農道歌……一二四

活農民道

序言

活農民道とは農民道を活かせと云ふのである、農民は農民道に活きよと云ふのである。

今日程農民が農民道に立たねばならぬ時はない、皇軍將兵が立派に武士道を立てるに於てをやである。

今更農民に農民道のあるを說くのでないが、不學の人や未聞の人もあらうと思ふが故に簡單なる說明を加ふることにしたのは私の老婆心と諒承(りやうしよう)され度し。

可成實例を上げ度いと思ふが、紙數に限りがあるので讀者の希望に副はぬ所もあると思ふが、拙著「昭和の義農」を併讀され度い。

緒言

我國には皇民道があり、臣道と唱へて居るが職域により或は武士道と云ひ、農民道と云ふので、等しく皇民道であり、臣道である。

由來我國は如何なる物にも事にも道を確め、道を踐まねばならぬことになつて居る。我國は言あげせざる國と唱へられて居るが、言論を後にして行を先にし、理窟を輕んじて實行を重んじ、行はざるものは本當に知つて居ない者だと云ふが我國の傳統であつた。行には作法があり、順序があり、規律がある、之れを心得ての行が道であるのである。

日本精神が見へざるものであり、日本魂は計量すべからざるものであるが、道によつて表現され、具體化さるゝのである。之れ故に皇民道は日本精神が行に表現される場合であり、臣道は日本魂が行に具體化されたものと見るべきである。

如何に日本精神が潛在して居ても之れが行動にならねば何の役にも立たぬ筈であり、如何に人一倍日本魂を把握して居ると云つても、之れが活動の上に見へねば有名無實になるであらう。故に精神と道とは不可分のものでなければならず、魂と道とは一如でなくてはならぬのである。

米英崇拜の結果は言論が先になつて行が後になり、理窟が巧みとなつて實行が伴はぬことになり、良心と行爲と一致せぬことになつて來たが、かぶれて其弊に悟ることが出來ず、ほれて其醜に目醒むることが出來なくなつたのは是非もない次第であつた。特に道を說けば劣愚と罵り、我固有の精神や獨自の魂を鼓吹すれば時代を辨へざるものと嘲笑するに至つたことは慨嘆に堪へない次第であつた。

日本精神は君國に自己を奇麗にさゝげる心であるから、其處に自由、自我は許されない道理である。日本魂は陛下と陛下のしろしめす日本國に自己の一切を差し上げる氣持であるから其處に個人主義や功利の觀念は認容されない譯である。之れは餘りに歐米の考へ方や理窟と違つて居るので、彼にかぶれ、彼にほれ拔いて居る

連中から見れば、日本精神の鼓吹者は馬鹿に見へ、日本魂の主張者は阿呆にも考へられたであらう。從つて道の存在が認められず、道の貴さが分らぬやうになつたのは、寧ろ當然であるであらう。

雲は何時迄も日光を掩ふものではない、霧は何時迄も視界を遮るものでもない。雲が散すれば陽光は燦として輝き、霧が晴れゝば廣い天地の萬象が鮮明となる。文明の都が鼻につくやうになり、文化の弱點が曝露されて來るや、何人も考へさせられ、反省せねばならぬやうになるは時勢である。偶滿洲事變が突發し、次で日支事變となるや、何處からとなく、誰が云ふとなく皇國固有の精神に目醒むるものとなり獨自の魂を禮讚するやうになり、臣道實踐が叫ばれ、皇民道が闡明されるやうになつて來たことは恐らく前代未聞のことであらう。

然し習慣は容易に改められぬものであり、癖は直に矯正の出來ぬものであるは、今日に始つたことではない。現に皇紀二千六百年を迎へて我建國の理想が明示され基本國策要項まで發表されて、次から次に國內體制が改められつゝあるが、未だ自

由思想が拔け切れず、特に功利に驅らるゝものが今尙多いのは掩ふべくもない事實であり、口には分つたことを言つて居るが不相變個人主義に固まつて居るもあるではないか。

私は今他の職域に從事する人達に對して言ふ暇を有つて居らぬので、私の倡伴であり、多年の知己であり、又た話相手である農民諸君に向つて、今こそ農民の踐むべき道に立つ時であり、農民道によりて臣道を實踐せねばならぬ場合であるを絕叫し、之れには農民道を活かせ、其道に活きよと慫慂するものである。

云ふまでもなく農民は天地を相手に働く者であれば作法がある筈であり、節に應じ氣候に服して行ふ農業に從事する以上規則がある譯であり、國法に遵ひ、學理に依らなければならず法理をも辨へねばならぬので、農民に農民道のあるが當然である。歐米に準じて教育をやつた我國近代の教育は徒に理論と技術とに馳せて其處に踐むべき道のあるを知らない爲めに、農學校でも農民道を閑却して居つたのである。今や教育は刷新されたとは云へ、不相變農民道を說き、農民道に依らしむるものゝ

ないのは奇怪に堪へぬことである。問學の徒が月給取になり、大地に足をふみつけて農業を行ひ、其處に安住の天地を作る能はざるは、之れが爲めであるまいか、私は敢て教育者に反省を促さゞるを得ぬのである。

私は到處で暇さへあれば農民道を說いて居り、求むる者があれば何處へでも行つて之れを說く、又た著述もすれば雜誌にも書く、話は下手でも運筆は拙でも、到處に篤農家も出來れば、轉迷開悟して農業に安心立命する者もある。自由主義が旺盛であり、功利思想が酣であつた當時でも農民道を聞き、農民道を知り、翻然として農業に復活した者も此處彼處に在る。彼等の中には農業に信仰を有つやうになつた者もあれば、驚くべき信念を有つ者もあるは、獨り彼等の幸福だけでなく祖國日本の爲め慶祝せざるを得ぬのである。それ故に迷ふ者が出來、惑ふ者が生じ、功名のために祖先傳來の農業を蔽履の如く棄てゝ他業に轉向するは農民道の存在を知らず、農民道の如何なるものかを辨へざる爲めと觀ぜざるを得ないのである。

今や農村は舊體制を脫して新體制によつて立て直しが緊張して居り、革新せねば

ならぬやうになつて居る。恐らく舊體制の農民は亡び農村は崩壞するであらうが、其代はりに新舊制を理解し、之れを採用する人は國母として認めらるゝ農民として榮へ、村は新に國礎として信賴され進展もするであらうと信ずる。之れは私一個の私見に非らずして、愛國愛民の士が等しく有つ信條であるであらう。

私はこうした信念の下に敢て活農民道を唱導し、農民と其指導者とに反省を求めんとする者である。

農民訓

其一　はしがき

皇國の農業は神業であり、神洲の基本的產業であれば、皇國に於ては天皇の御行事でもある。其尊嚴や仰ぐべく、其重要や肝銘すべきであるに、徒に西洋かぶれを

して其眞諦を忘却する觀あるは、痛嘆に堪へない事である。茲に農民訓をものするは其弊を矯め、特に農民をして其眞諦を把握せしめ、惟神の大道に則り、八紘一宇の大精神具現に貢獻する所あらしめんが爲めである。

其二　本　　義

一、瑞　穗　の　國

皇國は神勅により瑞穗の國に肇國し給ふた事は周知の事である。されば皇國は長へに瑞穗の國であらねばならず、瑞穗の國たらしめねばならぬのである。其事に任じ其事に當るは皇國農民の外なきを思ひ、其處に皇國農民の大使命と矜持とを自覺し、奮勵努力斃れて止むの覺悟に生くべきである。

二、天壤無窮の皇統

萬國無比の我國體は皇國の精華であり、皇國民の唯一の矜持である。之を擁護し、之を昂揚するは皇國民の義務である。就中無窮の天壤と共に働く農民は、其處に明

確なる覺悟を有ち、我國體擁護と皇運昂揚の大義完遂により、農民の職域奉公に萬全を期し、億兆の生活を保證する農業に精魂を盡くし、以て臣道實踐に遺憾なきを期すべきである。

三、農　業　の　本　質

凡ゆる職業中生命の生產をなすは農業に限る。それ故に國と家とを問はず永遠の生命を得るは農業に依る外なきを深く强く意識し、開國の當時重農の神諭ありし事を肝銘して、皇國彌榮の道は農業を盛にするに在りと信じ、功利に超越し、利害を眼中に置かず、一意農業の本質に殉ずる覺悟に生くるは、唯だ農民のみが有つ光榮と感激して農業に身命をさゝくべきである。

四、農　民　の　覺　悟

無窮の天壤と共に一切の生命を生產するは神業に從事するものなりと歡喜し、常に人事を盡くすの覺悟あるは勿論、限りなき智能が賦與されて居り、德器成就によりて衆力利用の妙が授づけられて居るを感謝し、凡ゆる時艱を克服し、難關を突破

し、皇軍將兵の勇猛敢果なる活動に劣らぬ活躍は、皇國農民の態度であり、面目であるを覺悟すべきである。

五、農民道の實踐

農民が其使命を明確に意識し、其責務を正直に認識し、其使命の遂行と、其責務の實踐に身命をさゝげ、一意奉公に安心立命する農民が踐むべき道であり、踐まねばならぬ道である。農民は此道に立ちて大御寶の名に背かぬ活動が出來、忠良なる臣民としての態度を發揚し得るのである。故に功利に囚はるゝ振舞は邪道であり、慾得に終始するは行道上の恥辱之より大なるはなしと觀念すべきである。今や皇國の共榮圏は擴大されつゝあり、異民族は光被されんとするに際し、我農民道こそ意義深しと謂ふべきである。我農民は須らく行道に示範し、以て則る所を明かにし、慶澤を共にするの抱負あるべきである。

六、信念の生活

なせばなるなさねばならぬ何事もならぬは人のなさぬなりけりの古歌に想到し、

有志必成の信念に生きるは蓋し皇國民の通念である。特に天地を相手に働く農民は此信念に生きざる限り或は失望し、或は落膽して退屈したり、沮喪する醜態に陷る恐がある。故に人力の進展極まりなき時勢を洞察して、なせばなるの信念に生き、有志必成の信條を把握して不撓不屈の生活を固執すべきである。

七、職域奉公

生命あるものゝ生產は農民の職域であり、依つて以て國民の生活を保證するも亦農民の職域である。されば民族の彌榮も、國民の興隆も其生活安定が根基である以上、農民の職責ほど重且つ大なる他に斷じてない。農民が玆に明確なる覺悟を示し、以て君國に忠誠を輸たすは皇國農民の態度であり、面目である。寢ても醒めても忘れまじきは職域奉公の實踐躬行である。

八、安業樂道

凡そ人生至上の幸福は業に安んじ、道を樂しむ事である。安業の欣快は財寶を以て購ふべきではない、樂道の歡喜は權勢を以て買はれるものではない。それは唯だ

業を信じ、業にはげみ、業に心身を投げ込む者にのみ與へらるゝのである。農業は天地と共に働くものなれば、天惠地慈に浴する幸福を享有する機會がある丈けそれ丈け、他の業者の味識を許さぬものがある。之農民に感謝報恩の行者を見、宗教に歸依する者の多き所以であるを思ひ、人生至上の幸福者たると同時に、他をして則らしむべきである。

九、我國是遂行の原動力

我國是たる八紘一宇の肇國の大精神に基き世界平和の確立に乘り出した我國は、之が原動力として國民の資質、體位の向上、人口の增加を確保すべきである。それは農民の存在が意識されねばならぬは勿論の事であるが、特に農民は茲に自覺を新にすべきである。農民の存在の價値が其處に在るを明確にするは唯だ農民の覺悟と其努力による外なしと自肅自奮すべきである。

一〇、兵　農　一　致

皇國の威力は兵力に待つ事多きは周知の事であり、强兵の母胎が農民であるも亦

異論のない事實である。而も光榮は常に皇軍將兵の上に輝き國民の信賴も亦それに依存して、農民の存在が動もすれば閑却されんとするは、兵農一致の我國に於ては怪しからぬ事である。農民は思を茲に輸たし、出ては護國の兵となり、入つては忠良の民たるを如實にすべきである。

其三　む　す　び

簡にして要を盡くさぬ憾はあるが、農民の守るべき所は大略述べた積りである。然し自侮の弊に陷りて之を悟らざる者多きを思ふ時、尙足らざるを痛感せずには居れない。此上は皇國農民を以て任ずる道士の蹶起を望むで止まざると、其處に民風の作興を希ふ外はないと敢て附記し置く。

農民訓を體得すれば農道の行者たるを得、農民道に活きるを得、又た活かすことも出來るのである。之を詳說すべく、此著をなしたと思はれたい。

第一章　農業の本質

其義を正ふして其利を計らず、其道を明にして其功を謀らずといふ文句がある。其意味は如何なる事でも物でも、其意義を正しく理解せねばならず、解釋をせねばならぬ、而して利のために物や事に囚はれべきではない。其道を明かに知り、辨へて功名に誘惑されてならぬと云ふのである。自由主義に驅られず、功利の思想に囚はれまいと思へば、此文句を再思三考すべきである。故に農業に從事する者は先づ農業の本質を正しく理解し、農に從事する者の踐むべき道を明かにすべきである。そうすれば功利に誘惑されぬことにもなれば、之れに超越し得るのである。

第一項　自重

古來我國には農は國の本なりと唱へられて居り、之れは恐らく我國民の傳統的信

念であるであらう。

朝鮮には古來農は天下の大本なりと唱へ、今でも田植の場合、之れを大書した幟の下で行ふ民風が今尙殘つて居る。

支那に於ては三千年前に孔子は足レ食、足レ兵、民信レ之は政治の要諦だと說き、之れは古今一貫の眞理を示したと唱へられて居る。

米國に於ては建國の父と崇敬されて居るジョージ・ワシントンは自己の體驗よりして、

『凡ゆる職業中尤も貴い、尤も健康にして尤も趣味あるものは農業なり』

と國民に敎へ、之れが今でも米國の信條になつて居る。

印度に於ては最高の國民指導者であるガンヂーは、印度の獨立を豫想して國民に凡ゆる職業中人類に幸福を與ふるものは唯農業あるのみ

と敎へ、自ら行ふて垂範して居る。

ヒットラーのナチス政權が確立するや、ダレーが農相に選ばれたが、同人は

『祖國の土を護り、祖國の血を永遠に傳ふるものは農業に從事するものに限る』と說き、第一次戰爭の失敗を繰りかへすまいと重農政策を採用して居る。

されば農國本の觀念は日本に在るばかりでなく、世界建國者に共通のものなることが分り、獨逸の如き食糧不足のために赫々たる戰果を臺なしにした體驗を有てる國は、其觀念を堅く把握することが分る譯である。

獨り我國は肇國の當時より政は祭により具現することになり、所謂祭政一致が國建となりて居るは周知のことである。我國には夙に國祭日があり、農業に關する祭事が重大となつて居り、又た我國に於ては　天皇の卽位式は大嘗祭を行はねば出來ぬことになつて居る。故に我國に於ては國をしろし召す主權と國の本である農業とは絕對不可分であるを思へば、我國に於て農國本の意義は深遠なりと謂ふべきである。

世に穢業多しと雖も　天皇と不可分關係に在るものが獨り農業のみであるを知らば誰か農業を侮り賤しみ輕んすることが出來やう。農民が其處に明確なる認識を得

ば自重せずには居れない道理である。

農民が眞に農國本の意義に徹し、我主權であらせらるゝ　天皇と不可分なるを明に辨へることが出來れば、農業に從事することの光榮を感じ、衿持を有つことも出來るであらう。其處に農民自重の態度が出來、農業に對する信念をも有つことが出來、農民の道に立たざるを得ぬことになるのである。

世の中には形を見て判斷を下だし目に見ゆる所に於て批判する者がある。農業に從事する者は糞水を掬する。泥田に匐ふ、蘆芥を大切に積む。之れは嗅い仕事であり醜い姿であり、汚い業であれば、之れをすることが農業であると解釋し、農業を賤業なりとし、農民を賤民なりと認むるがある。驚いたことには農民の中にもそう考ふるものがあり、そう信ずる者があるは掩ふべからざる事實である。農民が自侮の民になり自罵の愚をなし、第三者をして農民をそう思はしむるもあるは、情なきことの限りである。之皆農業の本質を辨へず、農民の本領に思ひ到らぬ爲めであるを、私は此處に絕叫せざるを得ぬのである。

戰時になつて我農林大臣は帝國議會に於て農村は食糧の基地であり、人的資源である、日本精神涵養の所である。故に總人口の四割を農村に確保せねばならぬと聲明したのは、非常時になればなる程農村、農業、農民の國家に對する重要性を認めずには居れなくなつた爲めである。實際勝つか敗けるかの鍵を握つて居る者は農民である。銃後の產業戰士に活を入れるのも農民であるのである。既に我國に於ては古來農民を大御寶と稱して居ることの偶然ならざるを思ふべきである。

實際農民が腹をすえてかゝれば、增產も出來れば、供出を豐にして增配をもなし得るのみならず、貯穀に進展することも出來る。我國の政治に於て農民に腹をすえさせることが出來ないとあれば、農民が農民道を活かし、農民道に活躍する時はないのである。之が私が農民に活農民道を唱導し、鼓吹する所以である。

等しく　陛下の臣民であり、一億擧つて　陛下に忠誠を誓ふが我國民であるが、獨り農民が古來大御寶の稱ある所以は何んぞや。農民こそは一億國民の生命の親であり、國民活動の力を與ふるものであり、久遠にわたる天地と共に働く者であれば

民族と民族精神との母胎でもある。農民の母性愛と努力とによつて國民の生命も活動も相續も保證さるゝのであれば、我國家にとりて眞に大御寶の地位に居る譯である。農民が其處に自己の使命を悟り、責務に目醒めば挺身懸命の働きが出來、他のために己を犧牲にすることも出來る筈である。斯の如くして始めて農民は自重の民となり國民より、敬仰され信賴さるゝやうになるのである。之れは一に農民道に目醒め農民道を活かすことであり、農民道によつて活動することである。

今や皇軍將兵は立派に武士道を活かし、之れに活きて居る以上、兄弟である農民が農民道に活かされぬ筈はなく、之れに活きられぬ道理はない譯である。現に目醒めた農民は農民道を活かし、之れに活きて居る者が、此處彼處に在るは蓋し周知のことであらう。又純眞無垢の青少年には全く功利に超越して、挺身以て地方民の推進力となり、義勇奉公の念に燃へて觸るゝ者を燒かずに置かぬ示範者もある。唯だ其數が少いので勢をなし流をなすに至らぬのは、皇國の爲め痛恨に堪へざる所である。政府は其處に思ひを輸たし、茨城縣は內原の青少年義勇隊に於て每年一萬五千

名の壯青年を集めて訓練をなしつゝあるが長鞭馬腹に及ばざる感なきを得ぬのである。故に獨り之れに任かせずして、地方の農學校よし、中學校よし、青年學校よし、凡ゆる教育機關に於て農民道を教へ、鼓吹し、隣組の寄合、實行組合の集會にも時に農民道の研究を慫慂し、指導者は農民道を説明し、農民に其道に依ることの必要を悟らしめ、目醒めし者には督勵を加へて他を誘導せしむる等、衆智衆力を其處に傾注することの必要を、私は敢て提唱するものである。

農民が農業の本質を理解し農民道を知るを得ば、其貴い職業であり、大切な仕事であるに目醒めると同時に、他より侮らるゝことがないやうに自肅するであらう。他より馬鹿にさるべきでないと、言行を愼むことにならう。又た他より輕んぜらるべきでないと、自己の人格を守ることになろう。當年の武士が武士道に於て自重を第一義とし、禮儀作法を重くし、以て人格を認めしめ、言責を重んじて、以て國民の信用を得、武道を練習して、以て國民より權威を認めしめた其用意に則ることにもなるであらう。如斯して農民が自重の民となり、輕擧盲動をせぬ國民となることが

農民道に生きる所以であり、農民道を活かさねばならぬと鼓吹する所以である。

自重は自慢に非らず、又た自高でもない。農業の意義を正しく解釋して其貴さを知り、其道を明かにして其道に進み、不迷不惑の民となり、我國家に殉する處に滿足することである、と思ふべきである。

第二項　働くことを知る

既に農業は國本的産業であるを知り、何物よりも貴き生命の生産をなす業であるを悟れば、之れに從事することの光榮と矜持とによりて身命をさゝげての働きが出來ねばならぬ譯である。農民道は之れを命じ、そうせなくては止まぬであらう。

特に働くことが賤しいことであり、不勞が貴いと解釋した野蠻未開の思想より解放された、勤勞卽生、懈怠卽死に目醒めて來れば、生きて居ると意識する以上、働かずに居れない譯である。

加藤完治氏は

ぼんやり働くは人形の如し慾のために働くは犬の如し、命令のために働くは奴隷の如し、眞の働きは宇宙の大生命の彌榮に貢献すべく血の汗をしぼることとなり。

と農業に働く意義を説いて居るが、其處に目醒めて來れば、功利に超越して默々乎として挺身的の勤勞をせずには居れない道理である。

然るに世相を通觀すれば、文明人と意識せる人の中にも、智識階級にも、特に農民の間にも勞働を厭ふ風が日を追ふに濃厚となり、勞働を忌避せんとする傾向は停止する所を知らざるが如きである。甚だしきは教育を受けし者、問學者の徒にも之れが流行を見ることである。

識者は其原因を追求し、指導者は因つて來る所を明にせねばならぬのである。

私をして言はさしめば、今日の人の働きには七種ある、曰く

其一は食はんがためである、此連中は食ふことが出來れば働かぬやうになる。

其二は金儲けの爲めである、此徒は金持になれば働かぬ。

其三名譽のためである、此輩は褒められるが最後働かぬ。

其四は命令の爲めである、此輩は命令者が居らぬやうになれば働かぬ。

其五は人生觀によりて働く者であり、之は生きて居る間は働く。

其六は自己の使命を意識して働く者であり、之亦眞劍に働く。

其七は天地神明並に父母祖先の恩に感謝し、報恩のために働く者であるが、之も一生を貫いて働く。

世に働く者の多くは一より四に該當する者が多いので、彼等は働くことの意義を知らず、働く術をも知らぬ。現に世の中には

1. 働き損の草疲れ儲けてふ言葉があり、
2. 稼ぎ貧乏てふ言葉もあれば、
3. 骨折つて叱られる傘屋の小僧もある。

故に働き甲斐がなければ働くことはツマラヌと云ひ、働きに對して報ゐられねば、働いても駄目だと悲觀し、働いて褒められもせず、返つて小言を食へば馬鹿らしいと觀念をする。之れ等が勞働を嫌惡し、之を忌避せんとする原因である故に働くこ

とを教へ、働くことを指導する者は無駄働きをせぬやう、換言すれば働の功德を味識して喜むで働くやうに誘導せねばならぬのである。

働きを研究して見れば其處に四の方面がある。曰く

其一は精勤であり、人一倍働くことである。

今日目醒めた者は、年に日數で云へば三百日以上、時間で云へば三千時間以上働かねばならぬと云つて居る。之れ精勤に目醒めた者であり、精勤功德に氣がついた者である。昔よりよく働く人と云ふは精勤の人であり、世が單順であつた當時は之れでよかつたのである。然るに世が複雜となれば、之れでは働き損の草疲れ儲けに陷つたり、稼ぎ貧乏の悲慘を味はねばならぬ恐があるので、精勤丈けに依る譯にはゆかぬので、

其二の賢勤卽ち人一倍上手に働くことに努めねばならぬのである。

賢勤は科學を基調として働くことであり、働きを合理化することである。具體的に云へば學理と倫理とを應用し、文明が齎らす利器の利用に遺憾なきを期すべき

である。今日働く者に學問を必要とし、教育を奬勵し、修養を鼓吹するは之れが爲めである。然し之れで働きに完全を得たりと思つてはならぬので

其三の敏勤卽ち人一倍早く實行するやうにせねば、所謂先んずれば人を制し、後るれは人に制せられるゝことになる。

近頃トップを切るとか、尖端を行くとか唱へらるゝが、それは敏勤の必要を說くものである。乃木大將は熟慮斷行と訓へられたが、今の人は斷行の勇に乏しい憾がある。故によいと信じ、出來ることゝ信ずる以上、卽時斷行の覺悟が必要である。武道に於ては先を制し、先の先を制することを教へて居るは、之れは獨り、武道のみではないのである。而して最後に必要と認むべきは

其四の耐勤であり、人一倍辛棒強く働くことである。

戰は最後の五分間を辛棒する者が勝つと云ふが、之れは戰のみではない、一切の事の成功は辛棒強い者の手に歸するは昔も今も變らぬのである。飽き易く、倦み易い性癖を有つ日本人には特に耐勤の功德に目醒めしむる必要があるのである。

働きを知る者は以上の四つを兼備する者であり、働きを知らしめるには以上の四つを把握せしめねばならぬのである。然らざれば勤勞の功德に浴し勤勞を禮讚することは出來まい、又た勤勞の功德に惠まれて勤勞を好愛することも出來まいと思ふ。

世には唯だ働けと主張するがあり、働けばよいのだと勸告するがあり、働きに限ると慫慂するもあるが、之れは働きに徹底せしめる所以ではない、又た眞に働くことを知らしむる所以でもない。同樣に徒に働の功德を說き、其效果を數へ、其利益を敎ふるもあるが、之亦徒弟の嘆なきを得ぬのである。

働く人の中には始め引きづられて働く間に働きの有難さに氣がつき、働くことが面白くなり、愉快に働いて居る裡に働きに同化し働かずに居れなくなる。働き得ることの幸福を感謝するやうになる。彼等は働き其ものより敎へられ、仕事より敎へられ、又た見聞によつて納得が出來、働くことの貴いことや、大切なことや有難いことを自得し、所謂道に立つことが出來るやうになる。農民が農業勞働にそうした體驗を得れば農民道の行者として世に立つことが出來、非常時を迎へれば其道を活

かして驚異的の活働を敢てし、第一線に立てる皇軍將兵の敵闘と相選ばぬ御奉公も出來るのである。大切なるは働くことを知ることであり、緊急なるも亦働くことを知ることである。

今日の日本は大東亞共榮圈の建設に着手した、八紘一宇の肇國の大精神具現に一歩をすゝめたのである。既に滿洲を援け、支那を誘掖し南方諸民族に指導の手を伸ばしつゝある。就中南方諸民族の多くは未開の民で働くことに分別を缺いて居るが支那や滿洲は古い民族が住むで居り古い文化に浴して居るから働くことを知つて居る。劣り難く、輕んずべからざるは彼等の働きであることを吾等は認識せねばならぬのである。ともすれば彼等に凌がれ、彼等の侮りを受けぬとも限らぬ恐がある。彼等は精勤であり、耐勤に驚くべき訓練を經て居る、之れは恐らく周知のことである。故に彼等の指導者であり、彼等の信賴を得ねばならぬ日本人は、賢勤と敏勤とに優越する用意がなければならぬのである。

現に今滿洲に開拓民として新らしい村を建設しつゝある我農民は作業の合理化に

於て、又た共同化に於て彼等の驚異の的となり、又た先手を打つことになつて彼等を感激せしめて居る。然し精勤に於て彼等は侮るべからざる立場に居り、特に耐勤に於て追從を許さぬ矜持を有つて居り、其處に我同胞の短所がある以上は、吾等は益々精勤と敏勤とに精進し長へに彼等の指導者たる地位を確保せねばならぬのである。之れには便利主義に陷りて彼等の力に依存することを豫防せねばならず、安價の勞働なりとて彼等の勞働に依賴することを避けねばならぬのである。而も彼等と協調し協和する推量と抱容とに遺憾なきを期すべきである。

第三項　理想信念に生きる

働くことを知り、働くことに徹底すれば、何を目的に働くか、如何なる希望に向つて働くかを明かにせねばならぬのである。吾等は斷じて走屍行肉の徒となつてならぬのであり、無意義な働き、徒勞に墮してはならぬのである。之れ故に昔から四つの目標が示されて居る。曰く

修身―役に立つ人、存在の價値ある人
齊家―家族の生活安定、子女の教育に遺憾なく、國家に奉仕するやう
治國―直接官公吏となりて治國に貢獻するか、間接に農工商の立場に於て國家に奉仕するやう

平天下―八紘爲宇の具現に貢獻するやう

教へられて居る。人各々環境は同じからず、職域も違つて居り、身分に別あり、年齢性別もあれば同一目標に進むことが出來ぬのが當然のことである。然し修身か齊家か治國か平天下か、其何れかに目的を立てゝ其處に到達するやう、其どれかに希望を有つて之れを充たすやうに働かねばならぬのである。

世に頭から和尚になれぬてふ諺があり、桃栗三年柿八年てふ言葉もある通りに、目的に到達するにも、希望を充たすにも年月を要するは、洋の東西を別たぬことである。而も凡ての物事が思ふ儘にならぬが世の常であり、順調に進行せぬが世相であるのである。從つて途中に故障が起り、意外な困難に遭遇し、思はぬ窮乏に陷る

こともあるであらう。又たよい事をして居つても邪魔されたり、妨害されたり、誘惑さるゝこともあるは覺悟すべきであらう。若し夫れ其等の故障困難窮乏に堪へかねて挫折したり、邪魔や防害や誘惑に敗けて斷念をしたり、中止をすれば、如何なる目的も達成は出來ず、希望も充たすことが出來ない。之れ故に克苦忍耐、不撓不屈の精神がなければならぬので、之れを信念と云ふ。

理想は信念によつて認められ、信念ありて理想に生き得るのである。換言すれば如何なる目的でも希望でも、之れが實現は信念によるのである。恐るべきは信念の力であり、貴ぶべきは信念を堅持することである。

或禪宗の和尚は理想信念なき人生を分つて、

ただうか〳〵と二十年
あれやこれやと二十年
これは〳〵と二十年

かくて六十歳を迎へ、若い時に今少し勉强すればよかつた、若い時に働いて置けば

こんな悲慘な目に遇はでよかつたであらうと、後悔しても何の役にも立たぬ。而も世にはそうした人生を送るものが當時多い、所謂醉生夢死に陷る者が少からずあるは、困つたことであり、嘆はしいことである、と說いて居るは面白いと思ふ。

世に所謂成名の人や成功の人は、盡く理想信念を確立した人であり、理想信念に生きた人であるを思へば、若い人達は勿論のこと、國家に重大な使命を持ち、職域奉公に遺憾なきを期せねばならぬ農民は、如何なる勞働にも信念が基礎にならねばならず、如何なる勤勞にも信念が基礎にならねばならぬのである。そうすることは農民道に活きることであり、農民道を活かす所以でもあるのである。

吾等の日常生活に理想信念を織込まんとすれば記帳をなし、勘定をなし、以て計劃を立てねばならぬのである。

記帳は日誌、收支簿、勞働日誌等色々あるが、家族の分任によつて可成精細に記入するがよい。

勘定は錢勘定と思ふてはならず、之れは自己反省と心得べきである。日誌をつけ

て居れば其つけ方によつて自己が進みつゝあるか、退きつゝあるかゞ分る。收支簿がつけらるれば過不足が分り、其原因を知ることが出來る。勞働日誌がつけらるれば家族の勤怠が分る筈である。少くも一年に一回、大晦日に年中の總勘定をして見れば改むべきことが分り、益々やらねばならぬことが分る。之れで改惡、向善に計劃を立てる。一年の計を元旦に發表することが出來るやうになる。年々歳々斯くの如くして倦まず撓まず進めば、理想に近づくことが出來、やがて理想が實現することになる。之れを敢行し斷行するは一に信念の力に依らねばならぬのである。

記帳が厄介のことでありとして記帳をせぬ者は自己を反省することが出來ぬ。從つて年を迎へても計畫を立てることも出來ねば、之を發表することも出來ず、元日はまたうか〳〵の初めかな、となつて進展も發達も出來ぬことになる。之れは理想を追ふて進む日本民族の計らざる所であり、皇國の彌榮を念願する皇國民の許さゞる所でもある。

日支事變が大東亞戰爭になつて、我八紘一宇の肇國の大精神、建國當時の理想が

具現することになつた。戰に勝ち拔かんと云ふも理想であり、共榮圈の建設も亦理想である。其處に必勝必成の信念があれば如何なる時艱に耐ゆることも出來、如何なる不便不自由をも克服することが出來るであらう。第一線と銃後との區別なく各自の職域を通して忠誠を君國にさゝげることも出來て、必勝必成が現實にもなるであらうと信ずるものである。

飜つて農村を直視すれば、最早舊體制の農村は存續が許されぬやうになつた。農業の經營が國策に順應するやうに、農民の生活が安定するやうに農村が再出發をせねばならぬことになつた。世間に皇國農村の建設が叫ばれ、農村の自治が或程度の制限に服さねばならぬと唱へらるゝも新たな農村が出來ねばならぬことを示唆するものである。之れは言ふに易ふして行ふに容易からぬことであり、其處に國の思切つた政策が樹立せねばならぬと思ふのである。

農林大臣は、總人口の四割を農村に確保すると聲明して居るが、如何して此理想を實現せんとするや、其方法手段は明瞭でない。全國の町村は片端から市に編入

され、市となりつゝあるが、國土計畫てふ言葉はあり、其仕事をする所もあるやうであるが、我國民には內容が分つて居らぬ。町村當局者は町村の前途に付て杞憂を抱かざるを得ぬ羽目に陷つて居り、農業に安定せる農家が移轉を餘儀されて、農業に從事するを得ぬ憂き目を見るもある。我國內にはそうした苦難に惱み前途瞭遠にして見當のつけやうがない所がある。思へば皇國農村建設てふ理想は六づかしい感があり、當局者も農民も信念を有つことが出來ぬ憾がある。

一面食糧確保に精進し、子孫の繁昌を遺憾なくし、日本精神涵養の母胎たる農家を作るは我國礎を固め、我民族彌榮のため、極めて大切なることであり、之れは緊急を要することでもある。之れには耕地反別が少い爲めに農家の安定が得難い。我國に於ては戶當耕地反別を擴張する必要がある。又た小作地では安定が出來ぬ憾があるとすれば、耕地は盡く自作地にする必要がある。之れを斷行するには滿洲開拓に進出せねばならず、進出せしめねばならぬのである。又た自作農になるやうに、自作農にするやうにせねばならぬのである。今日各地に分村計劃を立て滿洲進出を

企てゝ居るが、成績は漸次振はぬ勝であり、自作農の維持創設は八ヶ間敷唱へられて居るが、皮肉にも離村するものや轉業するものが反つて多いである。

農國本を信條とする我國に於ては飽く迄も農村、農業農民を或程度に確保せねばならぬのである。兵農一致の國柄である以上は、農村農民をして長へに强兵の母胎たらしめねばならぬのである。命令により所々方々轉住せねばならぬ家庭や、時によつて轉失業を餘儀なくさるゝ家庭に於て日本精神の涵養は容易のことではない。一定の居住を有つ、祖先の墳墓を守り、長へに鎭守を祀る者に非らざれば、所でなくば我國體の魂は養へるものではない。故に永遠に民族の血を繼持し、民族精神を涵養せんとすれば農村農民に之を求めねばならぬのである。其處に農民の自覺と努力との必要は云ふ迄もないことであるが政府が保證せざる限り落付て努力を拂ふことが出來ぬのである。私は何故に政府は此處に政策を明示し。之を實行する勇なきを怪しむ者である。正直に云へば農村の前途に理想を立て難い。況んや信念を以て事に當るに於てをやである。

人或は今は戰時であるが故に戰に關することが先決である、農村の建直しは後廻はしになるも餘儀なきことであると。私は戰時に於て何物よりも大切なものが食糧であると信じて居る、誰でも長期戰を覺悟すべしと云ふが、こうなれば强兵の補給が大切であるは誰にも分ることであらう。故に戰時なればこそ健全なる農村の建設が大切であり、安定農家の增加が必要であると叫ばざるを得ぬのである。特に第一次歐洲戰爭に於て獨逸が食糧不足に陷つて赫々たる戰果を臺なしにして慘敗を見たことを思へば、戰に食糧程大切なるはないと信ずる。而も增產が奬勵され、督勵されて、思ふやうに增產の實が上らぬのは獨り天候にのみ歸すべきではないと、私は敢て主張するものである。政府は深く思を輸たし、反省すべきであると、私は祖國日本を愛するが故に進言するを憚らぬものである。

理想は明確であらねばならず、信念は堅持されねばならぬ。何人も前途に光明を認むる所に勇躍もすれば、奮鬪もする、又た凡ゆる國難に耐へもすれば、克服することも出來るである。將來に期待する所が明かになれば、敢鬪もすれば力戰もする

が、昔も今も變らぬことである。今や國家的理想として肇國の大精神が闡明(かんめい)されて居る、故に國民は緊張もすれば國策に順應して敢て犧牲を拂ふを辭せぬのである。唯だ各自の職域を顧照すれば、米英流を棄て皇國的にやり直さねばならぬものがあり、戰時色に塗り代へねばならぬものがあり、勝ち拔かん爲めの手段を採らねばならぬことがあるので或は此先きは如何なるかに迷ふもあれば、如何して當面を切り拔かんかに惑ふがある、餘りの急變に驚いて着手する所を知らぬがあり。さればと云つて將來の見通しが出來ぬで困るもあるは掩ふべくもない今日の世相である。斯る際指導者の活躍は勿論必要であるが、法治國に於ては法の力に待たねばならぬ以上は、私は農村の爲めには政府の政策が明瞭になると同時に實行力の强化を、理想信念の確立に祈らざるを得ぬのである。

第二章　農業の經營

世が進むで來れば何處でも國民の生活が進むは勢であり、職業も亦進むだ經營をせねばならぬことになる。特に經濟に目醒むるやう指導が進み教化が開らけて來れば、經濟的に惠まれんとするやうになる。我國には二宮尊德翁の如き先覺者があり、經濟に付て獨自の敎を垂れたが何事も歐米に倣はんとする風潮は、我國民を歐米流の經濟思想に誘惑したのである。歐米流の經濟は生產、交換、分配、消費の四大別の下に說かれて居るが、之れは自由、功利の思想に順據し、個人主義に立脚したものであつた。勿論道德がある、經濟は之れを無視する譯に行かないので、國利民福を度外したものではなかつた。然し多くの者は我儘を增長させ、私利私慾に汲々乎たる有樣である、特に金銀を以て物を計量するやうになつて以來、金銀を追ふことゝなり錢のために働く事の如く、錢の爲めに生きて居るやうになつたのは、餘りに

も情けないことであつた。

よい話と云へば錢儲けの事であり、賢い男は錢儲けに上手な人である、感心する事は金を儲けたことであり、悧巧なやり方と云へば金儲に巧みなるを意味するのである。擧世沼々乎として一にも金、二にも金、三にも金、死ぬまでも金と云ふやうになつたのは淺間敷限りであつた。我國の民風には久しい間金錢を汚いものと思ひ、けがらはしいものと解釋し、苟くも人の風上に居る武士の間には金錢のことを口にするを恥辱としたものであつた。之れが變はれば變る世の中は、文武の人も官民も金を口にせぬものがないやうになつたのは驚嘆の外はないのである。

由來日本精神は金錢の力で動くべきものでなく、日本魂はこうした經濟思想に禍されるものではないので、日本精神を把握し、日本魂に生きる者は、世に容れない傾向となり、或は變人と見做され、或は奇人と取揃はるゝやうになつたのは、今尙世間の記憶に新なることであらう。世に二宮先生の報德主義を鼓吹する者があり、武士道を唱導する者があり、農民道を提唱する者があつても、親切なる者は參考に

供し心なき者は世迷い言と嘲笑したものである。祖國日本を知る者、又た我國體を認識する者は憤死するも馬鹿らしいので、時の來るを待つばかりであつた。

斯る世の中に獨り農業のみが歐米の經濟に超越する譯にはゆかない、農民丈けが其經濟思想の除外者たるを許さぬので、指導者は時流に乘つて歐米の經濟を說き込み、又た時勢に後れまいと自奮の農民は其經濟を採用したことは是非もないことであつた。長い間農民と武士とは經濟に緣遠いものであり、之れ丈け世間から馬鹿にされたのである。之れでは農民の面目も如何にせんやと、指導者も農民も歐米の經濟に精進したことは眞に己むを得ぬことであつた。

滿洲事變が勃發した當時より、我國有の精神に目醒め、我獨自の魂に氣がつて來、同時に皇國本來の姿を認めるやうになつて來た。心ある人が待望して居つた時が到來した、愛國者の鶴首した時節が招來された。あの輝かしい皇紀二千六百年は永久に紀念すべき年であり、吾等の記憶すべき歲である。卽ち其年に新體制が何處からとなく叫ばれ、時の政府は基本國策要項を出したのである。こうなれば經濟觀念が

違つて來、其行爲も改められるが當然であるので、皇道經濟さへ唱導さるゝやうになつたのは、我國に對し慶祝に堪へざる所である。然し歐米の經濟を說くは易いが、「皇道經濟を說くは學者間にも意見が一致せぬやうに見へる。報德經濟は考慮されて居り、研究も進みつゝあるが、未だ之を現代化して明快に說明する者がない。唯だ自由主義は排斥すべし、功利思想は除却すべし、個人主義は絕對に許るさない、と云ふ丈けで、經濟の內容について指導が進むで來ない、敎育が開らけて來ないので、農民は迷つて居るのである。

後ればせに歐米經濟を採用した農民であれば、歐米經濟に絕緣するも亦手間がかゝる譯である。而も移り難く、變はり難いも農民の特性であれば、農民の經濟思想が純化されるのは容易のことではあるまい。之れは農民に限つた譯ではないので、權法の力により、制度によりて促進する外はないであらう。然し歐米經濟に囚はれた者や之れが經濟と思ひ込むで居る連中は、法をくゞつても、制度をもぐつても歐米經濟を維持せむとする。闇取引が行はれ、橫流れをしたり、買溜をする社會現象

は之れが爲めである。

斯る際吾等指導者は一日も早く農民をして經濟の正道に上らしめねばならず、皇國固有の經濟に目醒めしめねばならず、大御寶の名に對しても正しき經濟を理解せしめねばならぬのである。之れは一に農民道に目醒めしめることであり、其道を活かすことであり、其道に生きることである。之れらは先づ農業の經營に思をいたし、農業經營によりて皇國農民の態度を明かにし、農業の職域に於て奉公の誠をいたすに遺憾なからしめねばならぬのである。

農業の經營は農業のやり方であり所により人により又た環境によりて千差萬別である。自由經濟の當時百姓は經濟的に合はぬ引き合はぬ、儲からぬと唱へそれが爲めに農民は自侮の民となり、甚だしきは轉廢業を敢てした者が流をなしたものである。然し委細に檢討すれば農業によつて名を成すもあれば產をなした者があり家を興し部落をすゝめ村をさへ榮へしめた者もある。前者は之れに目醒めざるものであり、後者は之れに目醒め、其處に周到なる用意と努力とをさゝげた者である。

今より二十五年以前、歐洲第一次の戰爭當時日本は漁夫の利を得る立場であつた爲め、此爲め此處彼處に成金が雨後の筍と云つたやうに出來たのだ。農民の間に成金が出來なかつた。其處で愈々農業は合はぬ、引き合はぬ、儲からぬと唱へ、一犬虛に吼へれば百犬實を傳ふと云ふやうになつた。故に百姓は駄目だ、つまらぬと云ふ聲が四方八方に聞へて來た。當時愛知縣の碧海郡農民は、誰に遠慮して斯る馬鹿なことを云ふぞや、合はぬならば合ふやうに、引合はぬならば引き合ふやうに、儲からぬならば儲かるやうやればよいではないか、と所謂四本柱經營をやり出した。

曰く精勤—人一倍働き、少くも年内三百日、三千時間以上働くこと、曰く合理化—學理と倫理の應用をなし、文明が齎らす凡ゆる利器（機關方法器械藥品等）の利用を遺憾なくすること、曰く組織化（そしきくわ）——農家に暇がある、之れが禍の原因であるから暇のないやうに色々の仕事を組み合せてやれと、多角形農業にした。曰く共同化——多角形にすれば農會や產業組合や倉庫を利用せねばならぬ、之れらは實行組合が活動せねばならぬ。卽ち精勤、合理化、組織化、共同化の四本柱を建て以て從來の農業の農業經

營に大なる革新を敢行したのである。之れが爲めに一時碧海郡は日本丁抹と稱せられ、四方より視察者が殺到したものである。如斯窮地に陷つても不屈不撓、道を開いて進み、局面を展開せしむるは、農民道を活かすとこであり、之れらは農民が農業の經營に目醒めて舊習を脱したやり方をせねばならぬのである。

第一項　進取進歩

長い間農業は世に後れた仕事のやうに考へられ、農業に從事する農民をもそう見做したのである。之れは獨り第三者ばかりでなく農民までがこう考へ、甚だしきは私は百姓だから世間を知らぬ、六づかしい理屈は分らぬと平氣に云つたものである。之れは農業の本質に通ぜず、農民道として進取進歩に研究工夫すべきを辨へざるが爲めである。

農業は天地の力を利用せねば絶對に出來ぬものであり、天地と協力せねばやれぬ仕事である。天地の力は偉大にして今日の進むだ人智でも未だ計量の出來ぬものが

あり、手がとゞかぬ奥もあれは深味もある。換言すれば無限の力を包藏するが天地であり、無窮であるのも亦天地である。文明は天地の力を利用することが進む所に認められ、文化は天地の力を進展せしむる結果に外ならぬのである。之れ故に人類の智能が啓發され、共同の力が利用さるれば天地の力は何處まで伸びるか分らず、何處迄擴大されるか分らぬのである。

農民は天地と共に働き、天地の力に依る以上自己の智能を啓發して天地の力に惠まれ、協力を輸たして天地の功德に浴せねばならぬのである。世が開らけ、人智進むで今日は科學を基調とすることになり、學理を取り入れ、倫理である愛護の情を注いで尙且つ及ばざるは多くの力を合はせてやるやうにすれば、農業は斷じて世間に後れる道理はなく、農民は文化人として活動の出來ぬ理由もないのである。

現に如何なる生產物でも當年に比して品質が良くなり、收量が多くなり、而も確實に收穫し得るやうになつた。其處には驚くべき進歩があり、中には過進と認むべきものもあるは蓋し何人も肯定せずに居れないことであらう。

二宮尊德翁は

昏もなく晨もなく常に天地は

書かざる經をくりかへしつゝ

と讀まれ、天地は無言の裡に敎へ、無聲の訓をして居ると悟されたが、今日の賢き農民は春夏秋冬により生産物が溫度や光線に支配さるゝを知つて或は促成栽培を考へ出し、或は抑制栽培を工夫し、世間に珍らしい物や美味い物を提供して人生に幸を感ぜしめ、世の文化に貢献せしことは周知のことである。時には科學の力を利用して優良品種を作り出し所によりては栽培法も研究して驚異的の多收を得る等、農業は當時に比して全く隔世の感がある。

農民は長い間經濟的に惠まれず、一時は疲弊困憊のどん底にさへ陷つたのであるが、自力更生に目醒めて經濟更生に乘り出したことは其意氣と努力に於て空前の成績を上げた。戰時となりて計畫經濟と變つたが、農民は穩かに善所する道を講じ、現に凡ゆる時艱克服に努力しつゝあるは、惡辣なる商人に搾取されて悲鳴を上げし

當時に比して隔世の感なくんばあらずである。それは一に農業の經營が進み、農民の智能が進んだ爲めであるのである。

一時は農村は寂しい所である、苦しい所と化したので、若い男女は離村を敢てし、農業に從事するを欲せざる風潮があつた。然るに共同の力に目醒めて、今日は農業に共同施設をすゝめ電化農村を見、機械化によりて加工製造に一生面を開きつゝあるもある。それは單に農業上丈けでなく生活の上にも功德を發揚しつゝあるは、公會堂の設置、共同浴場の開設、共同炊事や托兒所の開催並に娛樂の復活をも企圖するやうになつたのは、驚くべき進步であり、發展であるであらう。

特に交通機關の效果に目醒め、文明が齎せる交通機關の何ものかを有たぬ農村は僅少になつた。若い人達にして自轉車に乘らぬものは男子にも女にもあるまいと思ふ。それがどれ丈け農民の活動を助長し、農業の進展に寄與したかは想像以上であるであらう。

論じ去り論じ來れば際限がない。誰の考へも農業は進むで來た。農民も進むで居

ると思ふであらう。それは進取進歩が農民の履むべき道であり、農民は其道を踐みつゝあると立證するのである。

第二項　共同協調

農業は天地の力に人の力を添へねば、營まれぬ仕事であることは、餘りにも、分り切つたことであらう。天は仰いで見るものである、地は伏して見るものであり、人は相對して見るものであれば、立場が違つて居り、力にも別がある。違つたものが共力する所に生産が出來ることは、古今一貫の眞理であるから生産哲理と云ふ。それは獨り農業生産に限ることではない、陰陽の電氣は違つて居るが一所にすれば電光、電熱、電音が發生する。男女は相似たものであるが違つて居る、それが同心協力すれば、子供が生れて來る。故に農村に居る地主は土地の所有者であり、小作者は土地を有たざる者であれば有産無産に別つことが出來る、それが共同協調すれば生産は豐になる。若し彼等の間に階級闘爭が起れば良田は荒れ、良圃は雜草に掩

はれて何の生産も出來なくなるは、此處彼處に實例があるであらう。一時は我國にてもそうした爭議が流行したが、それは生産哲理を無視して徒に感情に制せられたことであり、愚の骨頂である。

皇國は建國以來共同協調を國是としたので、聖德太子が制定されし憲法には以レ和爲レ貴の一條が加へられたのである。又た我國の國民道德を規正せし儒教も、和の功德を說いたのである。孔子は君子和而不レ同小人同而不レ和と戒しめ、孟子は天時不レ如レ於ニ地利一、地利不レ如於レ人和一と人の共同協調を協調した。故に我國民は夙に和の功德に目醒め

家は家族の和合によりて榮へ
村は村民の一圓融和によりて進展し
國は國民の親和によりて興隆す

と心得其處に信條を有つて居るのである。それが米英思想にかぶれて敢て闘爭を事とし、それが如何にも進むだやり方と信じたのは餘りにも愚かなことであり、情な

いことであつた。近頃漸く其處に凡てが目醒め、政黨が解消し爭議が過去の話になり皇國本來の姿に立ち戻つて來たのは當然のことであるが、慶祝すべきである。

世が開らけ人智が進むで來れば來る程、個人の力の小さいこと、而して共同の力の大きいことに目醒め或は、共同團體を作り、或は共同施設を進め、以て事業の進捗をはかることになるは、洋の東西を分たぬことである。

農民は夙に農事改良を目的に農會を組織し、系統的に連絡をはかり、進展を期しつゝある。一時はそれが振はず、農會廢止論さへ起つたが、今日は農會ほど農民のために强力なる味方をするものはなく、從つて農民は農會を信賴して居る。又た經濟行爲に目醒め中間搾取より離脱すべく產業組合や倉庫を利用し、金融に、購買に、販賣に、共同使用に、保管に、驚異的進展を示して居る。それは中小商工業者が悲鳴を上げ產業組合反對の運動を起したことを徵しても分るのである。而して實行に遺憾なきを期すべく、隣保相助を具體化して、農村は今日實行組合を細胞組織として居るが、常會と云ひ隣組と云つて今更騷ぐ必要はないやうになつて居る。當年の

農村に比して秩序あり、組織あり、實行力もある農村になつて來たのは、全く共同團體の利用に目醒めた爲めである。今や團體統合が叫ばれ實施されても、下部組織の町村に於ては、大なる影響はないと思ふべきである。

共同の施設に至つては枚擧に暇がない程、各方面に進められ、一面農事の改良が促進され、一面農民の作業能率が進捗しつゝある。共同採種、共同苗代、共同豫防驅除、共同除草等であるが、特に農產物の加工製造に至つては一生面が展開され、著しく農村經濟を潤ほすやうになつて來たことは特筆すべきであらう。近來は更に生活方面に進展し、托兒所の設置、共同浴場、特に共同炊事に至つては燎原の草を燒くが如き勢を以て擴充されつゝある。今日の如き勞力不足に惱む時に於ては婦人の農業に進出を促すは當然であり、一般勤勞者の能率をはからねばならぬことも必至のことである。それには共同炊事に限るので、共同炊事が各所に歡迎さるゝは當然のことであるであらう。恐らく今後の農村はこうした方面に於て農村振興の道を開くであらうと期待さるゝのである。

農民は働くばかりで修養の餘地もなく、趣味に生きる餘裕もないとあつては、慘めなものである。農村が文化の施設と誇がなく、何時までも寂しい境地であつては農村には人が落付くまい。國礎を固ふする上からも、國力を培養する點よりしても、又た機會均等の見地よりしても、農村に文化の施設を進め、農民をして文化の惠澤に浴せしめねばならぬとの意見が、近來自他の間に昂揚して來た。現に東京には農山漁村文化協會が出來て、其處に力を傾注し、曩に千葉縣に於て文化實踐指定村を農山漁村に各一ヶ所宛作つて、指導をした成績はよいので、今や全國の農村にそれを普及せん計劃を立てゝ居る。こうなれば農村農民はそれを受け入る丈けの共同施設をせねばならぬのである。徒に人の褌で相撲をとるは、體裁のよいことでなく、又た自治の上よりしては恥辱とすべきであるが故に、今後此點に於て共同協調は新に進展するであらう。

今の農村は勞力、肥料、飼料、農用器具機械、並に藥劑の五不足にたゝかれて居る。食糧の確保も增產も、軍需品の供出も皆五不足を克服することが出來ねば駄目

である。之れ故に農務を盡くし、農力を擧げて其方法手段を講じつゝあるが、畢況共同の力を强化し、共同の施設を進める外はないのである。かくて農會の施設で一郡或は一地方に乳牛を飼ふことになれば勞力肥料の補給が出來、乳は營養をよくする。若し夫れ農村電化が出來れば、脫穀、製米、製麥、製粉は勿論病害蟲の豫防驅除も出來、凡ゆる點に進展を齎らすことが出來る。愛知縣に於ては名古屋市と農村とが連絡して市民の糞尿を農民が利用することとなつたが、それには輸送と貯藏との施設を要する。輸送は市が負擔し、貯藏すべくタンクを作るは農村が負擔することにすれば肥料不足を解消することが出來る。

時艱克服は畢況共同協調を活かすことによつて出來る、換言すれば農民道を活かし、それに活きればよいのである。

第三項　獨立自營

農民の强味は生活の獨立が出來ることであり、自營が出來ることである。二千

年前の昔支那の堯帝の治下に恵まれた生活をした農民は

日出に耕し、日入つて憩ひ、田を植へて食ひ、井を鑿つて飲む、帝の力それ之れを如何にせんや

と歌つたとあるが、此の氣聲は獨り農民に於て聽くべきであり、それを言ひ得る國民は獨り農民あるのみである。農民が眞に其處に自覺すれば勳位をうらやむ意見も起るまい、金銀財寶を欲する心持も出まい、全く大御寶として極めて落着いた民たるを得、安心立命、見るから頼母しい國民の姿をも示すであらう。

云ふ迄もなく農業は生活資料の生産をするのであれば、自己の生産によりて生活の獨立が出來る譯である。所謂自作自給、自給自足の民たるは農民にのみ許された特權であり、農民にのみ與られた恩典である。之を度外視して敢て他に求めんとするは、獨り農民の不幸ばかりでなく、國家の禍であるのである。

衣は木綿が今迄普遍的であつたが、それは棉を作つて得るものであり、絹布は桑で蠶を飼はねば得られぬものであり、麻布は麻から作るものであり。ホームスパン

は羊を飼ふて毛を取り毛糸を織つて作るので、今日のスフ丈けは農業では作らぬが、棉も蠶も麻も羊も農民が作り、飼ふものであれば、衣服は自給が出來る。

食に至つては澱粉質であらうと、蛋白質であらうと、脂肪であらうと、鑛物質であらうと、ヴタミンであらうと、多く農民の手によりて作らるゝものであり、それに加工をなし、變つたものに造りかへば、好む所に從ふて何んでも出來る。農民が調理を知り、料理を辨へ獻立を作るならば如何なる珍味佳肴にもありつくことが出來る筈である。

材木も疊も障子に張る紙も農業の生産であれば、贅澤を云はず、奢侈を欲せざれば住宅をも自給し得るのである。流を利用して電氣を起せば燈火も自給し得、動力をも得ることが出來る。

英米の僞瞞に乘つて金を珍重するやうになつて、金の便利を禮讃し、金の效果を崇拜し、金を萬能の神と仰ぐやうになつて物の貴さ、難有さが分らぬやうになつた。然し金を飲むで腹は張らず、金を背中に入れて寒さを凌ぐことが出來ず、金を頭に

載せても雨を防ぐことは出來ぬことを考へて見れば、人類の幸福を齎らすものは金に非らずして物であるを知るべきである。

戰になりて物に缺乏して來れば金があつても何の役にも立たぬ。故に金の價値は下るばかりであるが、物價は上るばかりである。そうした世相に接しながら今尙金に執着し、金に誘惑さるゝものあるは、憫(あはれ)なる哉であり、其愚や及ばずと謂ふべきであらう。

農民は生産者であるが、生活必需品の生産者であるが故に、今日都市の消費者に比して極めて惠まれた立場に居るは蓋し周知のことである。都市の人が一本の大根を買ふにも一列行列をなし、時に賣切れの憂き目を見る慘めさは言語に絶したことである。故に今日は農村生活を馬鹿にし、農民生活を愚とした連中が、今更のやうに農村を羨み、農民を幸福者なりと唱ふるやうになつたではないか。今まで農村に娘を嫁にやるを恥辱のやうに心得た者が、今は娘の一人は農村に嫁にやるが良いと云ふではないか。變るが世の中の常であらうが、餘りにも面白い變化ではあるまい

か。物の難有さを味識しては、凡ゆる生活資料の生産をする農民の權威を認めずには居れないのである。

其處に明確なる意識をなし、獨立自營に矜持を有ち、自給自足の態度をとるが、農民道であり、之れに立つが眞の農民であり、賴母敷(たのもしき)國民でもあるのである。

今我國策として産めよ殖せよと叫むで居るが、獨立自營の民に非らざれば生産は望むべくもない。我民族の血を永遠にし、民族精神を維持するも、亦獨立自營の民でなければならぬのである。故に國家の獨立を强化し、以て彌榮を招來するには農村、農業、農民の健全なる發達を望まざるを得ぬのである。之れ我國が建國以來重農の政治政策を採つた所以であり、農國本が我國の信條になつて居り、祭政一致により農業を尊重する儀式がある所以でもある。

米英を範とし、則として何事をも彼に追從せんとした結果、物を貴ぶ民風が退却して金を貴ぶやうになり、商工業を發達せしめんことに急いで、農業の大切なるを閑却したことは餘りにも情けないことであつた。而も戰時となつて軍需工業が盛に

なり、動力を得んが爲めに電氣工業や炭坑が賑ふやうになれば、日本は愈々商工立國になるものゝ如く考へたり、そうせねば戰に勝ち拔くことがことが出來ず、建設も出來ぬものゝやうに思ふものもあるが、沙汰の限りの短見淺慮である。强兵が至上の力であり、食糧が勝敗の鍵を握つて居るを思へば、農村、農業、農民の存在を尊重し、其の興隆進展をはからねばならぬのである。ローマ帝國は何故に亡びしか、大英帝國と天下に覇を唱へし英國が如何して退嬰の國となりしか。祖國を愛し、其彌榮を祈る者は思を其處に致すべきであり、沈思默考悟る所がなければならぬのである。

不幸にして我國は昭和十四年に大旱魃を迎へて思はぬ不作を招き、已むなく佛印や泰より米の補給を仰いだ。然るに增產の奬勵督勵を裏切つて昭和十五年は浮塵子の大發生により、昭和十六年は冷害により減收を見たので、所謂外米に依存せざるを得なかつた。佛印も泰も今は共榮圈內に入り、我と經濟協定をしたので、外米の融通は容易になつたので、中には我食糧に心配なしと速斷せるものがある。佛印も泰

も我領土に非らざる限り、糧を他に依存するは、我國の獨立を汚がし、之を危ふするものである。吾等は斷乎外米依存を排すべし、糧を他に求むる根性は絕滅すべきである。其の意識と覺悟は食糧の生產者たる農民になければならず、農民は自已の職業に於て食糧の確保をなすべきである。

今政府は盛に增產を奬勵して居り、凡ゆる手段を盡くして供米を要望して居るが、其處に共鳴して死力を增產に輸すべきは農民であり、若し增產が思はしからざれば消費節約を斷行して供出を圓滑にせねばならぬのである。幸に農民は凡ゆる食糧の生產者であり、米も麥も甘藷も馬鈴薯も作り、粟も黍も南瓜も大根も作り、果樹を栽培し、動物を飼育して其生產物を得る者であれば、食ふものに不自由をせぬが農民である。されば農民ほど正當に食事をなし得る者もなく、營養に惠まるゝ者もないのである。然るに食事に敎育訓練を缺いだ日本でもなく、營養に惠まれず、過食偏食の弊に陷り、寶の山に入りながら寶を得ざる情なき境遇に在つたことは同情に堪へないことである。故に今日の

如き食糧事情の緊迫せる折柄、農民が食糧の確保に對する使命を果たす上に於て食事を正當にする心懸けに生き、過食偏食を矯正するに努力せば節米も出來て供米が樂に出來、一般の消費者にも、特殊の消費者(産業戰士)にも配給を增し進むでは貯穀も決して六つヶ敷ことでないと信ずる。

食事は炭水化物、蛋白質、脂肪、鑛物質、ヴタミンを適當に採らねばならぬのである。米麥は炭水化物に富み澱粉質食物である。蛋白質は一切の肉類、乳や卵並に豆類の主成分である、之れ等を蛋白質物と云ふ。脂肪は牛乳より造るバタ、豆類、胡麻、動物の脂肪に求むべきであり。鑛物質は野菜、海草並に動物の骨に富むで居り、ヴタミンは肝油や糠や野菜果實に含まれて居るのである。西洋人は肉類によりて蛋白質脂肪を採つて居るが、日本人は豆類からそれを得て居る。而して寒い所でも著い所でも脂肪の必要を知つて脂油を用ふることに馴れて居るが、日本人は脂油を好まぬ傾向がある。之れは營養上面白からず、保健の上に於て警戒すべきであると油斷大敵の警語が出來て居る。然るに日本人は何時の間にか食事の觀念を飯を食ふこ

とゝし、朝食晝食晩食と云ひ、飯時であり、飯を食ふではないか、飯を食つて來いと云ふやうになつたので米の消費量が著しく增加し、炭水化物卽澱粉に偏した食ひ方をなし、而も過食の弊に陷つたのである。

今日は科學を基調とせねばならず、合理化せねば時勢に順應することが出來ぬのであれば、消費の規正が絶叫さるゝは當然のことである。科學は吾等に何の目的で食事をするか、何を食ふべきや、何程食ふてよろしいか、如何にして食ふべきやと敎へて居る。日本人は一日一人溫量にして二千五百乃至三千カロリーを得るやうに食へばよいと示して居る。米五合內外であれば、副食物を多分に食へば米の消費量を減らすことは六つか敷事では斷じてない。更に玄米食とし半搗米とすれば農民は一人一日四合で足り、三合で足る筈である。そうした食物の規正をなし、節約をなし得るは、一切の食物を生產し得る農民に限るのである。農民は須からく農民の惠まれた境地に感謝し、食ひ足らぬで困つて居る他の消費者に增配が出來るやうにしてやり、勞働の能率をすゝめ、勤勞の效果を增大し、以て國家の要望を答へしめね

ばならぬのである。之れは農民道に生きることであり、農民道を活かすことでもあるのである。

如何に戰線が擴大しても、如何に戰爭が長期になつても、日本の兵は獨立して居り、外國の兵を賴む必要はないのである。誠に心强いことであり、立派なこととして誇るに足ることであり、吾等は衿持を有つ譯である。唯夫れ食に至つては、動もすれば外米依存の聲を聞き、事實外米に依存せねばならぬやうになるは皇國の獨立を傷つけ、自營の面目を汚すことになる國家の體面よりしても、安全を保證する上よりしても、　天皇の宸襟を安んじ奉る臣道實踐の上からしても、食物の獨立は確立せねばならず、自作自給が動かぬことにならねばならぬのである。我國民が食糧に對する意識を新にし、其消費規正に眞摯なる態度を示さねばならぬは言ふ迄もないが、一切の食糧の生產と確保とに任じ國民の命の親であると認めらるゝ以上は、何としても、食糧の獨立を確立し以て皇國獨立に遺憾なからしめ、君民に安心を寄與せねば農民の面目はあるまい、農民道は死ぬで仕舞ふのである。

之を要するに農業の經營は、端的に云へば時勢の進歩に一歩も遲れぬてふ用意と努力とをいたし、常に研究工夫に精進し、自已の力の及ばざる所は共同の力も利用するに遺憾なきを期すべきである。而も農民に惠まれし獨立自營の貴さ難有さに明確なる意識を持ち、其處に衿持を傷つけざる努力を敢てするを得れば、農民は社會的にも經濟的にも至幸至福の民たる喜びをなすことが出來る。それは各地に存在する所謂成功農家や篤農家を見れば誰にも納得が出來るであらうと信ずる。

人事を盡くさずして徒に自已の職業にケチをつけるは愚の至りであり、農民として最善を盡くさずして濫りに農業に信念を有つことの出來ぬは愍むべき者である。まして人の仕事がよいやうに見へたり、他の職業を羨望して自已の業務に信賴する能はざるは、所謂度すべからざる無緣の衆生である。吾等は須らく農業の本質を把握し、農民の道を闡明し、其行者たるを期すべきである。

第三章　農民生活

長い間農民生活は國民嘲笑の的であり、侮辱の目標であつた。事實農民は經濟的に惠まれず、文化の惠澤にも浴せず、餘り野卑であり貧弱の姿であつた。之れは當時の政治政策の不行屆によるも、亦農民無自覺が招來したものと觀ずべきである。然し農民は長く梧下の阿蒙ではない、今日は立派な自覺の民となつた。世間の人も徒に形而下に囚はれて判斷を下したり、目に映ずる所に因りて批判を下すことの正鵠を得ざる所以を知つて來た。特に戰時になると、米英に則る虚榮生活の愚に目醒め、米英に對して戰を宣すると同時に虚榮生活にも戰を宣した。新體制に於ては國民生活は質實剛健を旨とするやうになり、規準を確保するやうになつたのは、見方によりては一般の國民生活を農民生活に則らしめんとするものであり、農民生活にならはしむるものである。故に下積となつて居つた農民生活が表に出た譯である丈

けそれ丈け、農民は農民生活に徹底せねばならぬのである。

第一項　質實剛健

農民の生産する物は、有りの儘の生産であつて、何等の修飾を施さぬものであり、唯だ汚れを取去る丈けである。而も野天に晒され、雨に浴し、寒暑と戰ふて働くのであれば、色は日に燒けて黑くなり、手足が荒れて醜くもなる。そうすることは農民本來の面目であつて、何等恥づる所がない譯であり、何等の虚榮に委されずして、眞に働く人の態度を示すものである。文化の進むだ今日でも、農民は交通に惠まれざる境地に居るが多い。或は山地を越え、或は徒歩で往復せねばならず、加ふるに重き荷を背負ふ場合が多いのである。そうした生活は安易に非らず、面白いことでもない。それ故に安易を追求し、逸樂を欲する者は、それを嫌ひそれを忌避せんとするは、蓋し人情であるであらう。それ故に質實の功德に目醒めざるものは、農民生活を苦行なりと觀じ、文化と隔絶したものと思ひ、農民生活を見縊り、侮視し、

忌避せんとする。それが世間に迂遠なる農村青年に浸潤する結果、農業勞働の忌避となり、果ては離村を敢てすることにもなる。之れ我國民が所謂文弱に流るゝ所以であり、虚榮に囚はれて其弊に目醒むる能はざる所以である。

然し寒暑に鍛はれ、汗脂に塗れ、辛苦を嘗めて誰でも身體が丈夫になり、精神が剛健になるは洋の東西を問はぬことであり、時の古今を論ぜぬことである。强兵が農村より輩出するのも勇壯なる、産業戰士が農民の子弟より徵用さるゝのも、それが爲めであるは呶々の言を要せざる所である。勿論農村も今日文化の惠澤に浴して來たので、今日の農民は當時に比して餘程弱くなつたとは云へ、それでも都市の人に比して强いと認められて居る故に責任のある。地位に居る者は農村を目して人的資源であると云ふが、無理からぬことである。

今や戰には勝ち拔かねばならず、建設はなし遂げねばならぬてふは我國民の信念であり、決意である。それを實現せんには我國民を强化するが、先決問題である。夫には我國民をして質實剛健たらしむることであり、質實剛健の國民生活に導くこ

とである。故に新體制に於て質實剛健を我國民生活の基準とせしは、餘りにも當然のことである。

今日は七、七禁令が出てゝ以來、一切の贅澤品は造るべからず、要るべからずとなつた。之れが爲めに轉業、廢業者が出ても致方がないと云ふことになつた。個人營業の自由を奪つても、國民强化のためにも、戰時體制のためにも、これは已むを得ぬと觀念せざるを得ぬのである。衣料が全く切符制になつたので、金があるからと餘計に買ふことも出來ねば、着ることも出來なくなつた。食物は一切配給になり、地位があるからとて、金があるからとて五圓以上の料理は食ふことが出來ず、酒も配給になりて制限され、飲む時間まで制限されるやうになつた。住宅は許可制になり財産があるからとて、廣大な邸宅は建てることが出來ず、地主なればとて廣い庭を造ることも許されぬやうになつた。如何にも窮屈となり、不自由となつたが、これを敢行するは我國民を質實に導き、身心を剛健にせむが爲めである。事實は夙に證明されて居り、歴史は明確にこれを立證して居る。

獨逸がナチス政權の下に置かるゝや、ヒットラーは凡ゆる國民をして若い時、換言すれば心身の發育が旺盛なる時を選むで農村生活を一定の間なさしめるやうにしたと云ふが、これは不便不自由と強い勞働によりて質實健剛を味識せしめ、體驗せしめんが爲めである。我國に於ても戰時となりて練成が主張され、勤勞が鼓吹され特に農業へ勤勞奉仕が流行し、遠くは滿洲まで進出するやうになつたのは、勞力不足を補給するのみが目的では斷じてない。農民側に於ては茨城縣の內原を始め、各府縣に農民道場が出來、農業勞働によりて訓練をなしつゝあるが、其成績に顯著なるがある。其處では獨り農民丈けにこうした訓練を施す丈けでは駄目だ國民全體に普及すべきであるとして名を縣民道場に改めた所すらある。實際血の汗をしぼる勤勞、骨肉にしみわたる勞働は農業によつてのみ味識が出來、體驗することが出來るのである。これが普遍的であり、徑經であるのである。

環境は耳に淫聲を聞かず、目に虛榮を見ず、從つて默々乎として働く裡に勤勞によつて身心の統制が出來る。其中に勤勞を知ることが出來、勞働に悟ることが出來、

質實剛健を把握し、其生活に浸り得るのである。

我國民は今こうした訓練を受け、こうした錬成を受けねばならぬやうになつたが、農民は生れながらにして此境地を迎へつゝある。其事に浸りつゝあるので、農民が強い國民となる、賴母敷國民となるは、餘りにも當然のことである。昔は農民は野卑なりと侮られながら國家の大御寶であつた。侮る者は空威張の民である、虛僞の民である、價値の少い者であることに目醒めなかつたのであり、目醒めしむる者もなかつたのである。時勢の力は大きく、强い、今はこれが一般の認識となり、遂に質實剛健は國民生活の基準となつたのである。

當年野暴なものと侮つたモンペイが、今は天下を風靡するやうになり、奥さんも嬢さんも娘さんも喜むでこれを使用するやうになつて來たことは驚いた變化ではあるまいか。當年お化粧を誇り、白粉を塗つて喜むだ連中が、今は賤視した農民の血色に學ぶことになり、色の黑いのが健康色であると唱導するやうになつて來たことも驚くべき變化ではないか。泥に塗れるを汚いと侮り、糞水を掬するを嗅いと罵り、

田に匍ふて除草するを醜いと馬鹿にした人達が、食糧の大切なことに目醒めて、こうした勤勞に奉仕をするやうになつて來たことは、全く隔世の差があるではないか。全く質實剛健の民が凱歌を上げ虚榮懦弱の民は存在を認められずなつたのである。農民は須らく此狀勢を直視し、生活に質實剛健を確保するが農民が踐むべき道であるを悟り、今日質實剛健に安心立命し、以て國民に示範する意氣に燃へ、此處に努力を新にする覺悟に生きねばならぬと、私は敢て唱導する者である。

第二項　感謝報恩

由來吾々は四恩の大切なるを敎へられて居り、一に曰く親の恩、二に曰く師の恩、三に曰く衆生の恩、四に曰く君の恩に悟れと訓練され、就中親の恩と君の恩を重んずるが、我國の傳統である。言あげせざる我國は口にこそしないが、親の恩は知り、一君の恩は山よりも高く、海よりも深いと悟つて居つた。而して報恩の道として親に孝、師には敬、衆生に對しては愛、君には忠を盡くすと心得て居つた。支那より儒

敎が傳はり、印度より佛敎を採用して以來、これが闡明されたに相違ないが、道の國であり、實行を重んじた我國では其實踐に努めたものである。敎育勅語に於て

我國民克く忠に克く孝に億兆其心を一にして世々其美をなせるは是れ我國體の精華にして敎育の淵源亦實に此處に存す

と訓へさせ給ふたのは、實踐を御認めになつたものと拜察するものである。吾等は孝經を讀まないでも、父母恩慈經を見ないでも、建國の當時より親の恩を知り、親に恩がへしの道として親に心配かけぬやう、親に安神させるやうに勉めたのである。特に萬世一系の　天皇が統治し給ふ大日本帝國に於ては吾々の親祖先より皇恩に浴して居るので、國民は身命をさゝげての御奉公を心得て居る。其關係は義に於ては君臣、情に於ては親子と云ふので、こうした國體は唯獨り皇國あるのみである。吾等は其處に無上の光榮を感じ、衿持を覺へて居ることは、至幸と歡喜して居るのである。之れ我國に於て忠孝が國民道德の基本と認められ、忠孝兩全を專念する所以である。而も大楠公は

身のために君を思ふは二心
君のためには身をは思はず

と喝破されて、君のためには親をも棄て、身命をも棄つるが臣道であり、日本民族本來の面目であると明示されたのである。之は吾等が夙夜服膺すべきであり、二六時中忘れてなぬらことであり、其處に日本民族の眞面目があるのである。

思へば戰時の今日、赫々たる戰果に國民は歡喜し、而も襲撃も攻撃もされずして安穩に働き平和に暮らし得る幸福は御稜威の賜であるを悟る時、吾等は忠誠をさゝげざるを得ず、盡忠報國の念に燃へざるを得ぬのである。我農民が親を夫を子を君國にさゝげ、尚且つ汗に塗れて銃後奉公に懸命であるは、餘りにも當然のことである。而も上に於かせられては、特に農村新年の御勅題を賜はりし大御心を拜承されば、農民は感謝感激せずには居れない譯である。

更に農業の經營に思を輸せば、農民は天地の大恩に意識し、之れに感謝せずには居れない筈である。農業は勿論人の努力に負ふ所多いが、天候に支配さるゝことの

顯著なるは誰もが認識する所であらう。而も天候は人力の及ぶ所でなく、今日の如き進める人力で如何することも出來ぬのである。之れ神明の加護を認め、之れに祈願する所以である。我國に於ては今尚二月十七日に各神社に祈年祭(トシコヒマツリ)が行はれ來る年月の五風十雨が順當なるを祈願するのである。十月十七日に神嘗祭を行ひ、十一月二十三日には新嘗祭を行ふて新穀の出來榮を告げ、出來榮を感謝するのである。之れ故に農民は神明の加護に感謝し、之れには報恩の道を踐まねばならぬのである。

天地並に神明の加護を禮讃し、之れに報ゆるには何時でも其恩に感謝し、禮讃が出來るやうに人力を盡くさねばならぬのである。農業を營む以上は天災地變のあるべきを豫想し

攻めさるを恃む勿れ、われに攻むべからざるものあるを恃め、來らさるを恃む勿れ、われに待つものあるを恃め

の用意をなし、態度を有つべきである。即ち旱魃の憂ある所は溜池を作り、用水を

引き、地下水利用の方法を講し、水腐の恐ある所なれば排水溝を設け、或は排水ポンプを仕掛けて、餘分の水を除き、滯停水を排すべし、風害を豫想して倒れぬやうに苗を丈夫に作り、或は風を除けて開花せしむる研究工夫をなすべきであり、病害蟲は之を豫防に手段をつくし、驅除に全力を傾注すべし、冷害に對しては早植、溫熱を生ずる肥料を與へる等地熱の昂揚に工夫をこらすべし。天は自ら助らる者を助くとあるは、虛言でも僞でもないことは、體驗を有つ者の信條であるであらう。之れでも不可抗力のことはあり、徒勞に屬することもあるが、人事を盡ぐして居れば怨む所なく訴ふることはない筈である。

何時でも嬉々乎として働き、天地神明と共に働ける光榮に感謝して日暮しが出來る所に人生の幸福を味識することが出來るのである。私の神風義塾には

感謝して日光を迎へ
感謝して粗食を味ひ
感謝して勤勞に服し

感謝して安眠に就く

と掲示をなし、此生活が出來るやうになれば、農民道の堂に入つた者であり、農道の行者であると訓へて居る。實際此生活が出來れば、何時も不平も小言もない、心の安靜が出來、眞に平和の生活が出來のである。

二宮尊德翁は

天德地德に報ゆるに我德行を以てす

と報德の道を闡明し、報德の敎を垂れたのは、賢明と嘆美すべきである。尙翁は四大要綱を掲げ　至誠　勤勞　分度　推讓　と喝破したる獨創の見に仰ぐべきである。其處には自由主義の入る隙はなく、功利に囚はるゝ心配もなく、個人主義に惰する危險もないのである。而も翁は經濟を離れた道德は勞して効なく、道德を離れた經濟は永續するものでないと唱導したのは古今を貫いた達見である。これ故に西洋流の經濟學は我國に適せずとなり、米英の經濟に則るは愚の骨頂なりと云ふやうになつて、俄に皇道經濟を確立すべしと論ずる者あるは當然のことである。之れは報德

經濟を現代化すればよいのであり、現代に適合するやうに組織立てれば可なりであるのである。今日の學者にして今尙之れを國民に明示する者なく、經濟界の巨頭にして則る所を知らしむる者少きは蓋し我國の禍である。

幸か不幸か今日は中小商工業者が或は轉業を餘儀なくされ、失業の苦杯を嘗めねばならぬのに、獨り農民は安住の境地に居る、樂土の安定を得て居るは、御稜威の御蔭と農業に從事する御蔭と感謝せねばならぬのである。今日は都市の消費者は物の不自由に苦腦を嘗めて居る、地位も財産も役に立たぬと悲鳴を上げて居るが農民は凡ゆる生産に從事する御蔭で計畫よければ何の不自由も感ぜずにすむ恩典に惠まれて居ることを感謝せずに居れない筈である。家族を御楯として君國にさゝげ、銃後の務として國家が要望する食糧や軍需品の供出によつて職域奉公をいたし、皇國臣民の務を果たし得る幸福を思へば感激感謝せずに居られぬ道理である。故に身命は勿論一切をさゝげて報恩の道を實踐し、報德に遺感なきを期するが農民の道であると悟り、農民道に活き、農民道を活かして國民に存在の價値を知らしめ、信賴の

的となるが、農民の覺悟であることを此處に提唱する譯である。

第三項　向　上

二宮尊德翁は

ちう〳〵となげき悲しむ聲きけば
鼠の地獄猫の極樂
ちう〳〵と嘆き悲しむ聲きけば
雀の地獄鷹の極樂

と讀まれ、猫が無心で遊べる鼠を捕ふるや鼠は地獄の瀨戸に陷りちう〳〵と鳴くが、猫は之で安心と喜ぶ。同樣に雀が飛むで居るを鷹が追ふて捕へるや、雀は殺されるので、ちう〳〵と悲鳴を上げるが、鷹は喜むで極樂の氣持になる。斯の如く猫は鼠を犧牲にして自己滿足をし、鷹は雀を殺して自己の慾望を充たすは畜生道である。夫れ人の道は己の好物は他に振舞ひ、己の欲せざる所は他に施さず、苦樂を共にし

共存同榮をはかる。世に神佛の道があれば、これは他の爲めに己を犧牲にする。人は人の道に立つべきであるが、若し畜生道を敢てするならば惰落であり、人の道に滿足せず更に神佛道を行ふならば、之れは向上である。と巧に分り易く墮落と向上とを說明された話が、二宮夜話に書いてある。

人若し墮落の道をたどることになれば世は弱肉强食、修羅の巷となり、向上の道を歩むことゝなれば世は安穩平和の裡に榮へる。米英の流義は多く畜生道であり、唯獨り皇國は向上の道をたどつたので、當時支那は我國を君子國と敬意を表したのである。

我國は建國以前より人は人で終はるものでない、必ず神に向上するものと認めたので、神道に於ては死を認めないのである。人の一生が了はれば神になると信し、呼吸が止み、目を閉ぢ身體が冷くなると、酒や米や魚や野菜果實を供へて、神になつた儀式を行ひ、祝ふのである。支那より儒敎が入り、印度の佛敎が傳つて以來、死を認むることになつて葬式を行ふやうになつたのである。故に我國有の惟神道に

於ては人生を終れば誰でも命と唱へ、神として祀るが我國の傳統である。之れは人は神佛道によつて向上するものと信じ、之れが慣行になつたのである。

制限さるゝものが人であるが、神佛は制限されぬものである。人は壽命に限りあるも、神佛は永遠の生命を有つものである。人は上下左右前後を閉ぢれば、何處へも出られぬやうになるが、神佛は自由に出入をする。故に神佛は人に上に立つものであり、人より貴い地位に位するものであり、人より一枚上のものである。これに人は到達し得るものと信じ、こう取扱ふが皇國の民風であるのである。

儒敎は天と云つて居るが漠として正體が分らぬ、佛敎の阿彌陀如來は想像の佛であつて實在したものでない、希督敎のゴットも亦假裝のものであるが、獨り我國に於ける神は屢々人であつた、實在の人であつたのである。こうした信仰を有つ、其信仰に生きるは獨り皇國あるのみである。妙なる哉と禮讚せずに居れない譯である。

誰でも神になり得るが、何時でも何處でも國民の崇敬する所となり、喝仰する神となるには、小我を棄てゝ大我に生きよと敎へる。自己本位、個人主義、私利私慾

をはかり、我慾に生きるは小我に囚はるゝものである。國のために、民族のため、天皇のために身命をさゝげての活動努力は大我に生きるものである。現に我國に於ては國に偉功をさゝげ、民族に福利を提供し、天皇に忠誠を輸たした者は身分の高下を論せず、職域の如何を問はず、性別を超越して神に祀るのである。而も之れは皇國民に私せずして、異邦他國の人と雖も、機會均等であるは、皇國の雅量である。八紘一宇の理想に生きる所以である。高麗神社は、高麗の功績を殘せし人を祀り、支那人で國益に貢獻せし人も、臺灣の生蕃人で祖國に殊勳を立てし人も等しく神に祀つて居るは、蓋し周知のことである。靖國神社に祀らるゝ護國の英靈は國民の身命であるが多いが、身命を君國にさゝげた人であれば現實に神に祀り、恐れ多くも　陛下の御親拜を忝ふすべきは、獨り皇國に於てのみ見る所である。國民が擧つて　陛下に忠勤を勵み、忠誠を誓ふは、偶然でないのである。獨逸のヒットラーやムッソリニーの兩巨頭が、皇國の傳統を羨み、學ばんとしてよくせざる所と嘆する、亦宜なる哉である。

我日本精神は小我を棄てゝ大我に生きる心であり、日本魂は君國と民族に小なる自己をさゝげる氣持である。我國民が其心にて活動し、其魂にて働けば、戰は勝ち拔くことが出來、建設も立派に成就することが出來るのである。

我國は未だ戰に敗たことがないので、世間動もすれば好戰國とし見るものがあるは以ての外の誤解である。我國は歐米が百年二百年間で建設せし文明を僅五十年間で建設したではないか。日本精神の活動する所、日本魂の躍動する所に驚異的の結果を齎らすは、身命をかけての働をするからである。其處には銅臭もなければ、金の音もせず、地位も權威も無力であるのである。換言すれば功利に超越し、唯君國のためと一意自己をさゝげる丈けである。強いのも、偉いのも、優越も亦當然であるであらう。

農民の働く姿は野卑であり、農民の生活は簡素であるから、ともすれば人の嘲笑を受け安い、寒さ暑さを事とせず、時には泥田に塗まれ、時には糞水を掬することもある。其勞働や血の汗をしぼるばかりであるから、並大抵のことではない。而も

世に之れを理解するものは少い、從つて敬意を表する者もなければ、禮讃する者もない。然し默々として働く彼等のために國民の凡てが生き得るのであり、活かされるのであるを思へば、農民は母の地位に居るものであり、犧牲の生活をなす者である。夫故に心ある者は農民に感謝し、譯の分つた人は農民の勞苦に同情をする。

水戸黄門公は

朝な夕な飯食ふことに忘れしな
惠まぬ民に惠まるゝ身は

と讀み、百姓人形に毎食初穗を供へて、頂きますと箸をとられたとある。畏れ多くも　明治天皇陛下は

暑しとは云はれさりけりにえかへる
水田に立てる賤を思へは

と御製遊ばして避暑を御見合になつたのである。乃木大將は田の草をとれる農民を見て敬意を表して通過されたとある。

然し農民が日本精神を把握しこれを自己の職域に生かして、所謂農民精神に徹底すれば、子供のために一身をさゝげる母性愛を有つことが出來、功利に超越しての活動が出來る筈である。唯だ自己の職域を通して忠誠をいたす、純眞無垢の尊い姿で働くことが出來やう。農民は其處に明確に目醒めねばならず、其處に目醒めずに居れないのが、農民道の行者たる農民である。

今日戰時になり、著しく資材が缺乏し、農業の經營が困難になつた。然し身命を棄てゝかゝれば、時艱が如何に深酷であらうと、之れを克服することが出來る筈で、克服せねば止まぬ努力をすることが出來る道理である。切角收穫した米を供出するは、汗をしぼつた丈けそれ丈け惜しい氣がするは無理からぬことであるが、國民の生命の親と思へば惜氣もなく供出が出來やう。愈々食糧事情が緊迫し國民が食ひ足らぬと訴へば、子を愛する母の氣持ちで自分が食ふべく保有する米をも供出することが出來やう、否供出せずには居れまい。如斯して世は平らけく、安らかに治まり、戰は勝ち拔け、建設は必成を期し得るのである。故に農民が向上の一路に邁進すれ

ば大御心を安んじ奉ることが出來、農民の職域奉公を完成して臣道實踐も出來る譯である。

遺憾なるは米英の思想が我國民の間に浸潤して居ることである。之れは思想の戰に於て米英に敗けることであり、後方攪亂に陷ることでもあれば警戒すべきであるが、其處に國民的自覺の足らざるは我國現時の禍であらう。更に遺憾なるは、農民の間に之れが感染し、浸潤して居ることである。或は闇取引に誘惑され、或は横流しを隱れてやり、或は供出をすら澁る者がある。之れは悉く農民の罪と斷すべきではあるまい、然しこうして疑を招くは、農民の面目上默視すべからざる所であり、名譽にかけても此儘に放棄すべからざることである。之れ私が特に活農民道を提唱する所以である。

更に警戒すべきは離村轉業の流行である。出征軍人が歸還すれば、皆農業に復活はしない、況んや傷痍軍人に於てをやである。徵用令によりて徵用され、軍需工業や鑛業や炭坑に働いて、其事に熟練すれば、彼等は再び犁鋤をとらぬことになる。

高い賃銀や優遇法に誘惑さるゝものは勿論農業を棄てゝ顧みぬが多い。如斯して增産が要望さるゝ今日、良田に草が生へ、良圃に木が立つ所があるは、掩ふべくもない事實である。吾等は新體制により新なる農村が建設されねばならぬと信じて居る。其處にも此處にも農民精神の鼓吹、農民道の錬成によつて目醒むる青少年のあるを認めて居るが、今日の農村狀勢に不快を禁せざるを得ぬのである。之亦私が農民道を闡明し、活農民道を提唱せずに居れない所以である。

私は日本人が偉大になる唯一の道は向上の一路をたどることであると主張するものである。日本精神を昂揚し、日本魂に生きると云ふは畢況向上の道をたどらしめんが爲めであると思ふ。同樣に農民が世の批判に超越して、眞に大御寶の名に背かず、賴母敷國民となるは、向上の道に目醒め、其行者になることである。其處に安心立命が出來れば不迷不惑の民となり、それが集つて村をなす所は、日本精神涵養の所と期待が出來るのである。

今や日本は大東亞共榮圏指導の立場に立ち、日本民族は多くの民族を誘惑善導せ

ねばならぬ義務がある。之れには我民族は擢つて向上の一路に邁進すべきであるが、共榮圈が盡く農によつて立つ所であり、先住民族は盡く農業に依存する者であれば、我農民の使命は大なる哉である。之れには唯農民が向上に志して彼等の信頼を得ることである、喝仰の的とならねばならぬのである。思へば向上に目醒むることの大事を自他共に認識して向上の民となり、以て向上の國に生れし面目を發揚せねばならぬでのある。

第四章　海外進出

我肇國の大精神具現のためには我民族の海外進出は必然のことである。遠く神功皇后の御雄圖も、太閤秀吉の遠征も、南洲先生の主張も皆之れが爲めであつた。德川幕府は鎖國政策を採つたが、雄心に燃へし連中は、支那に、其南方に民威を振つたものである。明治になり我民族が雄飛せんとするや、天下は英米蘭其他の勢力下

に壓せられ活躍の期を得なかつたのである。偶々滿洲事變が突發して間もなく滿洲は我國の後援によりて獨立することになつたので、我國は極力之を援助し、滿洲側に於ては全幅を傾注して信頼することになつた。滿洲は土地の割合に人口が少いので、開拓すべき所、改良すべき所が此處彼處に散在して居る。北支の山東省、河北、省より年々百萬人以上の入國者があり、之れがため、滿洲の人口が殖へつゝあつたのである。彼等は教育もなく、資本もなく、食ふことを目的に渡滿するものであれば、勞力を提供する丈けで滿洲開拓に餘り役には立たなかつたのであつた。然し何分頭數が多いのと、働くことに徹底して居るので、比較的肥沃の所は彼等に占領される許りであつた。

八紘一宇の理想に生きる日本民族は視て居れないので、滿洲事變以前より心ある者は滿洲進出の必要を說き、我國民の覺醒を促したのである。今茨城縣の內原で靑少年義勇隊の訓練に沒頭せる加藤完治君は其巨頭であつた。其內關東軍の軍人で加藤君の主張に共鳴し、開拓民の爲めに渾身の努力をさゝげた人は東宮少佐であつた

が、不幸戰死されたのは痛恨に堪へざる所である。然し佳木斯に東宮會館が建設され、開拓民は長く其遺績を偲ぶことにして居るので、東宮氏の奮闘は推察するに足る譯である。

滿洲事變が起り、張學良の勢力が滿洲より驅追さるゝや形勢は一變した。然し滿洲政府が獨立して創業の多忙に禍されて、滿洲開拓の計畫に着手するに至らなかつたが、昭和十一年に所謂二十年計畫が日滿政府の間に提結されるやうになり、二十年間内地より百萬戸、朝鮮より八十萬戸を移出することになつた。

而して其計畫を圓滿に遂行せん爲めに或は團體が出來、或は内地農村に分村計畫が唱導さるゝやうになつた。之で我滿洲進出は一生面を開くことが出來、同時に北支よりの入國者を制限して土地を確保することにもなつたのである。然し好事魔多しの諺にもれず、昭和十二年七月七日日支事變が突發して、我滿洲進出に頓挫を來たすことになつた。其儘に放棄するを許さぬは滿洲獨立を強化することの急務なると我内地農村の整調上或程度の農民を移出せしめねばならん必要とにより、滿洲開拓

は我國策として勵行することとなつたのは餘りにも當然のことである。而して從來内地開拓會社が取扱ひ、朝鮮の開拓民は鮮滿開拓會社が取扱ふて、其間に差別があつたのを統制することになり、今日は開拓民は内鮮を別たず一本建になつたのは滿洲開拓の進歩と認むべきであらう。

日支事變が年を經るにつれて應召者が多くなり軍需工場や鑛山や炭坑の仕事が多忙となるや徵用さるゝものが多くなつて滿洲開拓民は思ふやうに出られなくなつた。加ふるに大東亞戰爭が始まつて以來戰線が擴大され、其處に多くの人を要するやうになり、何處でも勞力不足に悲鳴を上げるやうになり、一面增産が叫ばれ何んとしてゞも增産を現實にせねばならぬので、何處の農村でも勞力を確保せんとするので滿洲開拓民が計畫通にゆかない憾がある。政府は國策として奬勵し、督勵し、滿洲政府も呼應して招致に努力しつゝあるが思ふやうにならぬ傾向がある。此處に於てか兵役に關係せざる十六歳以上十九歳迄の青少年を、義勇隊として訓練し、之を滿洲に送り出し現地で更に三年の訓練をして開拓村に配置することにしたが、一面徵

用令にたゝられ、一面兵役の年齢が低下したので思ふやうにならぬのである。然し國策として奬勵し、滿洲政府は之れによつて獨立の基礎を強化せんと希ふて居るので、我國は國家の體面上でも開拓民の進出に官民共に認識を深め努力を新にせねばならぬのである。

内地農村の將來を思へば、新なる體制の下に國礎と頼み得る農村が建設されねばならぬ必要に迫まられて居る。農林省が皇國農村の建設を唱へ、其實現を聲明せしは、之れを如實にするものである。既に農林省や農會は適正規模農家の調査をした筈である、其結果を詳にせずと雖も、農家を安定し、農民をして大地に足を釘づけにし、土の聖者として凡ての使命を遂行せしむるには、先づ適當なる耕地を所有せしめねばならぬのである。之れは何程を適當とするやは環境により、經營によつて多少の相違あるべきは勿論であり、從つて即斷を許さずと雖も過小農では駄目であるとするは衆議の一致する所である。

今本那農家は五百五十萬戸と云ふが、其内五反未滿の農家は百八十四萬餘、一町

歩未滿は百七十九萬餘、合はせて三百六十三萬戸と云ふ。之れ等は安定農家たるを得ぬものである。故に之を整理して安定農家たらしめることを計畫するが先決問題である。其處に政策の樹立が急務であり、其實施が焦眉の急務である。農林省は既に自作農の維持創設を積極的にすると唱へて居るが、時の流れは五反未滿の農家を增加しつゝあるのである。

農村は分村計畫を立てゝ過剩農家を滿洲に進出せしめんと奬勵したが、色々の事情は其實施を困難に導いて居る。政府は滿洲開拓と過剩農家の滿洲進出は國策と唱へて居るが、今日動もすれば大聲里耳に入らずの感なきを得ぬのである。之れは皇國農村の建設が畫餅となる恐があるので、官民思を新にし、努力を倍加せねばならぬのである。

蒙古は未開の地であるが、黄河の流域は廣い、其處には開拓の餘地が澤山ある。蒙古が凡ゆる意味に於て重要地帶であるが故に、今我國は共榮圏の一翼として極力其獨立を援助しつゝある。然し蒙古の土地を開發し、其生産力を盛にするに非らざ

れば、其獨立を强化するを得ぬは滿洲と同樣である。蒙古人は漢民族に比して協調し易い、從つて協力するも容易であるが故に滿洲以上に進出の要があり、其效果もある譯である。夫は困難を伴ふであらうが、然し蒙古人は本來勇敢であるが故に、指導如何によつて思ひ半ばに過ぎざるものであらう。我國民の海外進出について蒙古を閑却してはならず、閑却するを許さぬものがあるのである。

支那は廣い、民族は無敎育者が多い丈け之れ丈け開發の餘地も多ければ、改良する餘裕も澤山ある。從つて支那の新政權を援助し、我國と目的を同ふする民衆を指導する責務を有つ我國は日本民族の進出を覺悟せねばならぬのである。私は支那に對して政府が如何なる計畫を立て、如何に實施しつゝあるやを知らぬ。又た北支に於ける特殊地域に於て如何に宣撫が行はれつゝありや、又た如何に指導の手が伸びつゝあるやをも知らぬ。故に遺憾ながら私見を述べることが出來ぬが、土地の開發農業技術の向上。經營の改善に大なる餘地が我國民に託せられて居ること丈けは分るので、其處に進出せねばならず、又た進出せしめねばならぬ必要を認めざるを得

ぬのである。

南方の諸方面と云つても、我國より廣い所が澤山あり、其處には多くの民族が住むで居る譯である。私は南方に付ては未知の者であるが、農業の開發によつて自他を利するものゝ多いことは明かである。從來南方の諸方面は英米蘭が支配し、彼等は先住民族を野蠻人として存在せしめ、凡ゆる資源を掠奪し、搾取して居つたので不行屆の所が多く、不始末の點が多いのは、吶々の言を要せざる所である。之れが大東亞戰の戰果として、我勢力下に入つた以上は、開發と指導は我國の責務となつた譯である。開發によつて自他を利するは共存同榮の道であり、指導を進めて先住民族の活動を促すは共榮圏の名を實にする所以である。今や南方經營は國策として遂行せねばならず、我國の權威は之れによつて發揚されねばならぬのである。之れには我の進出が必要であり、其進出は獨り官吏のみであつてはならぬのである。其處に農民が新なる用意と努力とをいたすべきは當然のことである。

徳川三百年間の鎖國主義は我國民をして退嬰せしめた、皇政復古になつて皇化普

及するや日本は安樂の天地となり、之程よい所はないと土地に執着するやうになつた。爲めに引込思案をするやうになり、鄕土にかぢりつき主義者にもなつた。然し文明が進むにつれて、我固有の精神は海外進出を促し、雄飛の志に富む者は世界各地に進出した。東洋は勿論米國に、南米に、メキシコに、亞弗利加に、濠洲に日本民族の足跡を印せざる所はないやうになつた。然し其處に何の統制もなく、指導もなく、系統もなく、各人の自由に任かした爲めと、一時は棄民の評判さへ立つやり方もあつた。

切角海外に進出して根據地を作つても英米に非らざれば和蘭の勢力下に雌伏せねばならぬやうになつた事は痛恨の至りであつた。乍遺憾我國には海外進出を國策とする政治も行政もなかつたので、米英其他に及ばざるものありしは、掩ふべくもない事實である丈け之れ丈け、吾等は海外進出に付て認識を進めねばならぬと唱導せざるを得ぬのである。農村に於ては過小農に付ての問題は古い問題であつて、農政に關與するものは誰れでも研究を怠らなかつたのである。

然し政治の力がなかつたので自由移民として成行に任かせたことは是非もない次第であつた。一時はブラジル移民が流行し、其處に會社まで出來たが、棄民の惡口を招くが落であつた。之れが滿洲に移民の口が開いて、初めて我國に移民政策が樹立し、移民について我國民の認識が新になつた譯である。

滿洲移民は凡ゆる角度より見て極めて大切な意義を有つて居り、價値を持つて居るものである。之れ故に滿洲移民は眞摯に熱心に考慮すべきであり、取扱はねばならぬのである。之れが農業移民に重きを置く以上は、繰り出す根元である、我農村がもつと眞劍にならねばならぬのである。私は其處に農民道が活用されねばならず、農民道が活かされねばならぬと信じて、敢て活農道を提唱するものである。

第五章　皇國農村の建設

理論で云へば我國の農村は皇國の農村である筈であるが故に、今更皇國農村と云

ふは笑止に堪へぬことである。然し我國の農村は或は活動の上に於て、或は内容に於て、或は權威に於て低下の傾向を示し、眞に國礎と信頼し得る所が少いのである。而も前途に幾多の危懼を抱き現狀の運用にさへ困りつゝある所すらあるは蓋し周知のことである。

廣義に於て農村は農民安住の所であり、農民が農民の職域に於て奉公の道を遺憾なくする所でもある。然るに時の流は農民を迷惑の淵に陷れ、或は不安に驅らるゝもあれば、或は離村を敢てし、轉業をするもの滔々乎として流れをなし風をなす。

而も當局に何等の對策を講ずる者なく、自治の農でありながら自治によつて解決の道を講ずる者もない。或は我農村は何處へ行くであらうか、如何なるのであらうかと疑惑の念を起すものすらある。如斯して果して農村は皇國農村の名を汚がさずにすむであらうか、我國礎として信頼し得るであらうかは問題とせずには居られぬことである。

我國は日を追ひ、月を重ねて農村の重要性を認めつゝある、特に事變になり更に

大東亞戰を迎へて之れが痛感されつゝある。斯る折柄皇國農村の建設が叫ばれ、舊體制の農村を新體制の下に建て直ほすことが要望さるゝは、餘りにも當然のことである。今我國は國内體制の刷新をなしつゝあるが、農村に手が伸びずに居るは遺憾に堪へないことである。

第一項　皇國農村の建設者

誰が皇國農村を建設するか、政府か農村かは明確にせねばならぬことである。法治國の我國に於ては政府の力に待つもの丶多いは勿論であるが、我國は　明治天皇の叡慮によりて夙に自治制が布かれて居る。政府の命令を受け監督に服すべきは云ふ迄もないことであるが、今日までは自治機關も農村の人が構成するのであり、農村人の福利增進をはかるべき事業も農村の人が計畫し、實行することになつて居る以上、農村は自治によつて榮ゆべきであり、進展すべきである。現に自治機關が整備し自治心の發達せる所に於ては、村は安住の地となり、樂業の所となり、國礎と

して信頼すべき勢を示して居る。故に政府の指導監督よろしきを得其處に積極性を認めねばならぬが、さりとて農村の自治を進展せしめば、皇國農村の建設は、敢て官僚の力に依存するを要せぬ譯であり、寧ろ其處に農村人の自覺と自治とを認め得るのである。

農村には人物が少くなつて來たことは掩ふべからざる事實である、之れが農村自治に大いなる支障を及ぼすは當然であらう。加ふるに英米の功利思想が農村に浸潤し個人主義が流布して、農村の人は町村自治體のために、誠意と努力とを拂ふことが稀薄となつて來たことも事實であることは、誰もが肯定せずには居られまい。一面は政治的に、一面は經濟的に、一面は思想的に農村は恐るべき感化を受け、試練を受け、洗禮を受けた。爲めに農村は混亂に陷り、迷惑し、恐慌に沈むだのは、時勢とは云へ大なる打擊であつた。

私は此處に詳說する暇を有たず、又た之れは何の役にも立たないことであれば語る勇氣もないが、農村には大なる禍であつた。打擊の影響が今尙殘つて居り、禍の

不幸が今日も農村に累を及ぼして居るが、然し皇國農村の建設者は農村自體であるは動すことが出來ぬことであれば、農村人がここに覺醒するが先決問題であり、覺醒せしめねばならぬのである。

第二項　皇國農村の資格

端的に云へば農村が國家に負荷する使命を遂行し、責務を果たし、分擔を遺憾なくする所とならねばならぬのである。我當局太臣は

農村は食糧の基地であり

人的供給の源泉であり

日本精神涵養の所である

と聲明したが、農村の使命分擔は之れであると謂つてよからう。

其使命遂行は如何して出來るが、責務は如何して果すか、其分擔は如何して遺憾なきを期するかは、皇國農村の重大義である。之れには先づ其處に住む農民が絕對

に生活安定を得ることであり、土の聖者として農業に身命をさゝげての努力をさゝげることであり、己が職域を通して奉公の誠をいたすことである。勿論世が開らけ人智が進むで來れば、生活は復雜となるであらう、農業の經營も亦容易ならぬことになるであらう、特に御奉公の道は多岐にわたるのである。此處に之れを詳說するを得ぬが、然し皇國農村と云へば使命遂行の所であり、責務を果たす所であり、分擔を遺憾なくする所でなければならぬのである。之れは言ふに易ふして實現は幾多の困難を伴ふは勿論であるが、然し資格を具備するに非らざれば皇國農村は假空のものとなる。指導監督の地位に居る者も、自治自力による者も、萬難を排して資格を具備し、資格を確保するに努むべきである。今後の農村指導者は其處に活動を新にせねばならぬことを覺悟すべきである。

道途傳ふる所によれば、農家の安定には

一、一定面積の耕作をなし、

二、耕作地は自己の所有とし、

三、其所有權を確立す

ることが絶對必要であると云ふのである。これは長い間論議されたことであり、政府も其處に考慮して夙に自作農の維持制設を講じつゝあるが、事實は自作農が小作農に轉落するものが多く、世間の期待に副はぬ勝ちである。

戰時になり食糧が配給になり、窮屈になれば農業以外に職域を有するものが、自己の食糧を補はんが爲めに、或は自己の食糧を確保せんがために二三反歩を耕作する者が著しく增加した。米の產額を增し、耕作反別が殖へても、之れ等は食糧政策に何の貢獻をなすものではないのである。一面小作者の土地返還が多くなり此處彼處に草が生へたり、木を植へたりする所がある。從つて皇國農村の建設を疑はしめ、前途遙遠の感を抱かしむる狀勢にあるは、今日の現狀である。

第三項　資格の具現

皇國農村の建設は凡ゆる角度より見て、我國焦眉の急務であるが故に、國策とし

て斷行すべきである。勝ち拔く爲めにも、戰の目的達成のためにも、萬難を排し、凡ゆる情實を超越して實行すべきである。其處に國民の理解を求め、農民の協力を要請するに非らざれば出來ぬのが之れであらう。

一定面積の耕作は所により、經營により多少の相違はあらうが、一町歩以下の耕作では安定農家は出來ぬと云ふが常識であらう。我國の農民は一町歩以下の耕作者が多いので、一町歩以上を耕作せしめ、多々益々辨ぜしむるは容易のことではない。土地を國家管理にするか、農村團體に統制せしむるか、孰にしても地主をして土地を奉還せしむるか、解放せしめねばならぬのである。又た農民をして一町歩以上の耕作をなさしむるには過剩の人口を整理せねばならぬ、海外進出をなさしむるか、轉業せしむるか、思切つた措置をとらねばならぬのである。

耕作者の土地を所有せしめねば安心して耕作が出來ぬ以上は自作農たらしめねばならぬが、如何にして自作農にするか。所有權の移轉購入資金の融通、交換分合等其處には容易ならぬ問題が澤山ある。政府は自作農維持創設を積極化すと聲明し、

其手段を示せりと雖も、聲に應じて響く感なきは如何したことであらうか。安定農家が或は軍需工場に馳せ、或は炭坑に走つて農耕作を老人婦人に任かせる傾向が此處彼處に在る。斯くして果して自作農の面目を發揚し得るであらうか、存在價値を昂揚し得るであらうか。土地に執着し、墳墓の地を護らんとする農民に歡迎せねばならぬ施設が、之れ程に歡迎されざるは、自他共に考慮せねばならぬことではないかと、私は主張せざるを得ぬのである。

農業は天災地變に禍さるゝことが多い、爲めに購入した土地、傳來の耕地を賣却し、或は質流しにせねばならぬ場合が多い。切角自作農になつたはよいが、土地所有者になつて喜むだのは束の間で、再び之を喪ふは、農民の堪へ難き苦痛であり、失望でもある。我國に土地の兼併が行はれたのも之れが爲めであり、土地の狹いに似合はぬ大地主が存在するやうになつたのも之に基因するのである。而も農村には長い間經濟機關がなかつた、農民は經濟的の教育訓練に沒交渉であつたので、悧巧な商人にやられたり、巧猾な中買人に欺かれたり、今日に於て想像も及ばぬ苦杯を

嘗めさせられて自作農は小作農に轉落した。特に耕地が狹いので小作料を高く要求されたり、或は小作者同志で小作料を吊り上げて、不當の小作料を拂はねばならぬことになり、小作者に轉落しては自作農にもどることは容易のことではないのである。故に自作農を維持創設するには、一定面積を法の力で賣買質入れが出來ぬやうにせねばならぬのである。我國には聲はあるが未だ實施されないので、之れが實施を一日も早く斷行せねばならぬのである。他に方法はあるが、法的措置をするが捷徑であるのである。

要は、皇國農村の建設は農村、農民が任じて實現すべきであるが、其處には政府の強力に依存せねばならぬものが澤山ある。當年に比して我農村は經濟的にも生活的にも隔世の感がある程進展もし、向上もしたので、農村團體にも相當の力を具備せるがある。然し法の保證なき限り安心して着手の出來ぬものがあり、政府の力を藉りて始めて落付いて實行の出來るものがあるは掩ふべくもない事實である。當局に人物乏しく、民間に有爲の人材を見ざる今日に於ては特に其感を深ふせざるを得

ぬのである。

皇國農村は國家奉仕に生くべきであり、國策に洵じて活動する農民で組織せねばならぬのである。從つて國家と一心同體となり、國家と共に運命を共にすべきものであれば、國家がトップを切つて農村が追從するが順序ではあるまいか。之れ私が皇國農村の建設に付て、其實現を促進する上に政府の政策が早く樹立し、其實行が一日も速かならんことを切望する所以である。

第六章　皇國農民の使命

云ふ迄もなく、皇國農民は皇國のために生きる農民であり、皇國のために働く農民であり、皇國の爲めに死する農民である。換言すれば農民道に徹底し、農民道の行者でなければならぬのである。

第一項　食糧の確保

今日の皇國は食糧の確保を要望して居る、一億の國民と一億石の米があればよいとふ時代は過ぎた。今日は人口一人に付ての米の消費量は殖へつゝあるが故に、確保すべき食糧は増さざるを得ぬのである。之れ増産が急務となり、代用食が奬勵され、代用食物の増産が絶叫さるゝ所以である。之れは盡く農民の職域であり、他の職域に向つて絶對に要望すべからざることであり、要望しても何の甲斐もないものである。

農村は今や勞力、肥料、飼料、農用器具機械、藥劑の不足に惱むで居り、中には名狀すべからざる苦勞を嘗めて居るが、兼ねて唱導された有畜農業は進捗し、自給肥料は目醒しく増産し飼料不足に研究工夫して動物を殖やし農用器具機械には工夫を凝して仕事を進めて行き、藥劑不足も克服すべく品種改良に一歩を進め、豫防法に研究を進めつゝある。其雄々しき活動は第一線の將兵に劣るべくもないは、皆農

民道を體得する者か、然らざれば無意識裡に農民道を行ふ者である。

開墾に耕耘(こううん)に默々乎として汗をしぼり、懸案となつて居つた土地改良に挺身して濕地の排水を敢行して二毛作地となし、厄介視された耕地の交換分合に示範して部落民を斷行に導き、或は作道の改修に効果を上げて作業能率を進むる等は、不便不自由を叫ぶ一方に於て着々乎として進行しつゝあるは、全く農民道に生きる者や農民道を活かす者の活動であるのである。

増産の道に勇往邁進して尚且つ増産が裏切らるゝや、消費の規正に乘り出し、多年の癖であつた偏食過食の弊を規正して節米を敢てし、食事に自覺を進めて一面保健食をなし、一面節米をなし、以て供出を圓滑し、割當以上の供出すらなしつゝあるは、生命の親らしく、母性愛の所有者らしく見ゆる。如斯して生産に緣なき消費者に一粒でも増配が出來るやうになし、進むでは貯穀まで出來るやうにするは、農民道に生きねば出來ぬことである。中には米を三合に制限し、或は玄米二合五勺で、人一倍の活動をなし、以て農民の食糧に惠まれ居るを立證するもある。

昭和十八年一月五日の愛知縣追進會員の大會に於ては、增產のために

一、有畜農業に徹底する、農家は一頭以上の大動物を飼育する

二、耕種改良規準を遵守する

三、土地改良を斷行する

と誓約し、節米に付ては

一、毎月八日は朝飯を廢止する、以て將兵の苦勞を偲ぶ

二、如何なることあるも農家に配給米の四合以上は食はぬ

と決議したが、獨り愛知縣の農民道に目醒めた者に限つたことでないと信ずる。

時節柄農民道に生きる者の食糧確保に對する態度は眞劍であり、懸命である。如何に皇國農民の意氣を示し、大御寶の姿を偲ばしめつゝあるかは、賴母しき限りである。

第二項　人的供給の源泉

今や國策として人口の增加を要望し、生產率の向上、乳幼兒の死亡率低下、恐るべき疾病の排除等凡ゆる人口の增加手段に最善を期し、厚生省まで新設さるゝに至つた。

何時でも何處でも生產率の高いのは農民であり、他の追從を許さぬのである。之れは凡ゆる調査が證明して居り、事實は雄辯に物語つて居る。故に眞に人口增加を國策とするならば、皇國農村の建設を急ぐべきであり、安定農家を保護すべきであり、速に農民の確保を現實にすべきである。

戰爭が長期になれば强兵の供給が豐かにならねばならぬ、何時までも陸續として强兵の輩出を見ねばならぬのである。强兵の母胎は農民であることは、時の古今を論せず、洋の東西を別たぬことであり、特に兵農一如を國是とする我國に於て然りとす。故に勝ち拔かんには强兵の母胎を確保せねばならぬは呶々(どゞ)の言を要せざる所である。此意味に於ても皇國農村の建設は急がねばならず、農民の確保を現實にせねばならぬのである。

戰爭には武器がなければならず、優秀なる武器が出來ねばならぬのである。然らざれば徒に將兵を損し、我同胞をして犧牲者にする恐がある。特に相手の英は腐つても鯛の觀が有り、米は金と物とに惠まれた立場に居るが故に、盛に飛行機も戰車も潛水艦も軍艦も造りつゝある。思へば油斷は許されず、徒に兵の强いに依存してはならぬのである。

加ふるに物資の乏しき我國は資源の開發、動力の獲得に懸命の努力をさゝげべきであり、其處に眞劍の活動を敢てせねばならぬのである。而も廣い戰場も共榮圈も船で連絡をせねばならぬので船が絶對に必要であり、造船は焦眉の急務である。今政府は鋼鐵、石炭、輕工業及造船に重點を置くと發表したが、餘りにも當然のことである。

思へば第一線に立つ將兵も、銃後に立つ產業戰士も責務の大なるに相違はない、御奉公にも優劣はなく、重要性に於ても差別はない。而も農村は强兵の母胎であるばかりでなく、實に產業戰士の母胎でもある。論より證據農村に勞力が不足し、之

れに農村は多大の苦痛を嘗めつゝあるが、徵用さるゝものが絶へない。都市の人を徵用しても役に立たぬとは、何處からとなく漏れ聞ゆる評判である。然し源泉は養はされば枯渴するは免れぬことであるを思へば、人的源泉として農村の確保と、其彌榮をはかるは國家の仕事として嚴肅に着手されねばならぬことである。勿論農民には其自覺があり、其處に衿持すら持つて居るが故に、農民が其處に使命を痛感し、其遂行に忠實なるは云ふ迄もないことである。唯だ之れを妨害するものゝあるを恐るゝのみである。

第三項　日本精神涵養の所

今更我民族に此精神がなければならぬとか、日本魂を把握せねばならぬとか云ふは、野暮の骨頂であらう。然し肇國の大精神を表現し、八紘一宇の大理想を具現するには、其處に幾多の難關が横はり、强敵もあると覺悟せねばなるまい。其難關を突破し、其强敵を打倒して追進するは、理や法や術のよくすべき所ではない。理屈

で分らず法で定めることが出來ず、量器で計量も出來ぬ皇國固有の精神、我民族獨自の魂に期待する外はないのである。

皇國を偉大にし、日本を强化する妙力は日本精神の活躍であり、不思議な運命を開拓するは日本魂の發射である。故に皇國のあらん限り此精神は涵養すべきであり、此魂は培養せねばならぬのであるが、偖て涵養は何處に之を求むべきや、培養の地は何れに在りやを檢討すれば、之れは農村の外にはない、農村を除いて適地はないと云ふが、恐らく誰にも異存のないことであらう。

流轉のはげしい生活者には之れは望めぬことであり、祖先と共に住み、鎭守の神と共に居ることの出來ぬ階級に之れは期待が出來ぬ、又た職域の安定せぬ者に之れを望むは、無理なことである。士農工商と天下の民を四民に分つた當時は士民は一定の住所が與へられ、且つ生活が保證されて居つたので、尤も安定の民であつた。士民に武士道が鼓吹され、之れによつて日本精神が涵養され、日本魂が確保されたのは當然のことであつた。

當時農民は居住も職業も漫りに動かすことの出來ぬ立場に在つたが、情けないことには生活が保證されなかつた爲めに流轉の憂き目に出遭ふた。之れでも農民は農業の本質により、又た傳統によつて尤も正直な國民であり、犧牲に生きる訓練を經て居つたので、士民に次で社會的の地位を得た譯である。明治時代を迎へ、四民並等となるや、世は百八十度の廻轉をなし、國は皆兵となる義務を負ふことになつた。之れが爲めに一時は武士道がすたれ、皇國固有の精神が行方不明になつた觀があつた。

加ふるに英米の文明が浸入し、一にも歐米、二にも歐米、三にも歐米、死ぬでも歐米と歐米を謳歌する裡に、自由主義が流行し、功利思想が跳梁し、個人主義が跋扈するやうになり、世の中は歐米色で塗りあげられたことは、餘りにも情けないことであり、淺間敷ことの限りであつた。當時日本精神を鼓吹したり、日本魂を高唱すれば變人と見做し、私が職域により農民に農民精神を說き、農民道を提唱したのでさへ、奇人のやうに嘲されたものである。然し當時に於てさへ、純眞なる農村青

年は之れに共鳴もすれば歡迎もした。之れも其筈當時の農村には古武士の面影を有てるがあり、農民道の行者として仰がねばならぬ者もあつたのである。

故横井博士は武士道は農民に繼續されると論ぜられたが、之れは事實の上にも認められたのであつた。之れは農村の環境が日本精神涵養に適して居り、農民生活が日本魂を繼承するに都合がよかつたので、之れは今日に於ても同樣であるのである。

然し農民の中にも日本精神に生き、日本魂を把握し、聯域上よりして農民道に立つ者は、生活の安定を得た者に多いことは、昔も今も變らぬことである。過小農で其日の生活に脅威を受くる者では、志ありと雖も之を行ふ能はずの感なくんばあらずである。之れまた皇國農村の建設を見ねばならぬ所以であり、農民の生活安定を計ることが急務であると提唱する所以である。

農民は生活安定に自力を輸たすべきであるは勿論であるが、多くの農民をして其境地に立たしめんとすれば、農民の力のみでは不行屆の感がある。故に政府が既に

「農村を日本精神涵養の所と聲明する以上は、農民の力を伸暢せしむるやうに對策を講すべきである。教育によるも必要であり、指導によるも勿論大切であるが、農村及農民の手の屆かぬ所に政府が助力するは、無理な要求ではあるまい。私は皇國彌榮のため、皇運隆興のために、之れを望まざるを得ぬものである。

近時誰もが農村の國家に對する重要性を認めて來たことは、蓋し空前のことであらう。思へば戰爭より考へても、建設より見ても、農村が重大な役割を有ち使命を有てるは餘りにも明白である。而も我國の中には今の日本は工業立國になりつゝある、形而上に於ても農業に安定する者が少くなるばかりであり、形而下に於ても工場に走り、炭坑や鑛山に赴くが多い。當年の英國の二の舞を演し、獨逸の復徹を踐むが如き觀があるを如何することも出來ぬではないかと云ふがある。之れは我國の智識階級であり、物の分つた連中であるも驚かざるを得ぬ。

吾等は農國本を信條として居り、兵農一如は變はるべくもないと信じて居り、祭政一致の國體は動くべきものでないと確信して居る。必ずや皇國農村は面目を新に

して建設され、農民は長へに國家に負荷する重責を盡くし、以て大御寶の名を永遠にするものと期待して居る。之れ丈け現狀に滿足が出來ず、義憤の念に燃へざるを得ないのである。

第七章　結　論

私は佐賀縣や福岡縣、東北では秋田縣、中部日本では愛知縣や三重縣、北陸道では富山縣、山陰道では島根縣に毎年農民道の講習會を開いて居る。中には十年計畫を立て、既に之れが了つて次の十年計畫をなせるがあり、私は不相變出講をして居る。

昭和五六年の農村恐慌時代を經て、經濟更生が力說され、之れが實施さるゝや、各府縣に農民訓練所が出來て、何處でも農民道を體得せしむることになつた。山形縣の自治講習所や茨城縣の友部に於ける國民高等學校は之れよりも以前に農民道場

として異彩を放ち、其處の修了生は農民道に生きるを生命としたものである。

恐らく今日の農村青年男女にして農民道の存在を知らざるなく、農民は農民道の行者でなければならぬことを心得ぬものもあるまい。唯だ農學校が未だ其處に明確なる教育訓練を示さぬ憾があるが、時勢は之れを許さぬことになつたのである。

茨城縣は東茨城郡内原に青少年義勇隊本部が出來、滿洲進出の青少年を教育訓練しつゝあるが、部長が農民道の權化である加藤完治君であり、設備は他に類例を見ることが出來ぬものであり、世界的であると云ふも過言ではあるまい。内容は各方面に周到なる用意があり、緻密なる研究に基ける整備があり、特に大量の訓練が出來るやうになつて居るので、既に二ヶ年間は冬期に二回に分けて一萬五千名の訓練をなし、十七年の冬より十八年の春にかけて一ヶ月一度に一萬五千名の訓練を斷行した。昭和聖代の盛事と慶祝せずには居れないのであり、非常時の今日我國の强味と歡喜せずに居れないのである。

其處で訓練を受けた一部の有志を以て嚮導隊が編成され、到處に出張して農事の

難事を解決し、農業勞働の粹を發揚して居る。訓練を受けて歸鄉せし者は府縣に於て結成して挺進隊を組織し、農村が負荷する責務に對して推進力となつて居る。彼等の挺身的活動や推進の力は驚異的であつて、第一線の將兵が齎らす戰果に劣らぬ功果を上げて居る。かうした壯青年は農村に殖へるばかりであり、青少年は倍加する丈けであるが、應召者が多いのは勿論である。

彼等の前には無理もなければ不可能もない、不便不自由は勿論問題ではない。賴母敷限りであり、人意を强ふするに足るものである。彼等は周邊の人を感化するもあれば、引きづる力を有つて居るもある。又た農村には先覺者も數は少くも居り、時勢に目醒むるもあつて、若い人達の誠意に感激するもあれば、活動に共鳴協力するもある。故に彼等と共に農民道に生きるもあれば、農民道の行者たるもあり、又た農民道を活す運動に參加し、共同の戰線を張るもあるので農村の前途は絶對に悲觀する必要はないと信ずる。

皇國農村は彼等によつて建設される運命となつて居り、彼等は其處に自己の使命

を認め萬難を排して其建設を現實にせねば止まぬ意氣に燃へて居る。唯だ彼等の前途に横たはる障害は除くに如かずであり、困難は未前に防ぐに如かずである。私は此意味に於て政府當局者の政策を慫慂し、先覺者に指導者の親切なる援助を求むる譯である。之れは皇國農村の建設は國家の急務であるが故に、彼等をして餘計な骨折りや、無駄働きをさせてならぬと思ふからである。

皇軍將兵によつて軍人精神は立派に發揚され、武士道は闡明された。同樣に銃後の職域に於て農民精神が鮮かに認識され、農民道が見事なる活躍を招來するやうにせねばならぬのである。私は此意味に於て今新に活農民道を公にせしことを重ねて告白する者である。

最後に農道歌を添付したが、之を三唱し五唱し十唱すれば、農民道が分ると同時に、農民道を活ねばならぬやうになり、之れを活かさねばならぬことになるが爲めである。

農道歌

岩槻三江君作

一、我は農民祖國の寶　農は尊い神の業
遠つ天祖の勅宣のまゝに　道は直なる農の道

二、我は若人高鳴る胸に　農を興せの血が躍る
我は土の子祖國の爲に　土を活せの鍬を振る

三、風に晒され雨には打たれ　汗で磨いた鐵の腕
泥田這へども誠の人は　泥にや染らぬ陽に染る

四、廣い天地に大手を振つて　自由氣儘な農の業
神に捧げた心の糧を　神に賜る農の道

五、花の都が何美やまりよ　野には心の花が咲く
野邊に咲く花眞の花よ　花の都は造り花

六、人を相手に流さう血より　天地相手に流す汗

七、誠心を一挺の鍬に　土に立つ身の氣安さよ
飾り僞り妬みもなくて　籠めて御國へ御奉公

八、皇國精神の鍬打振れば　武士の道とそ農の道
大和心は櫻の花よ　海の外にも道は付く

我は農民我等の道を　高く踏まうよ祖國の爲

出版會承認（あ420625號）

昭和十八年七月十五日初版印刷
昭和十八年七月二十日初版發行

（三、〇〇〇部）

定價金九十一錢
行爲稅相當額四錢
合計九十五錢

編者　農山漁村文化協會
　　東京都麹町區有樂町一ノ十一
　　右代表者　古瀨傳藏

發行者　木田吉春
　　東京都牛込區津久戸町三十一

印刷者　高橋印刷所
　　右代表者　別府太郎
　　東京都小石川區指ヶ谷町四
　　（東一三八二番）

配給元　日本出版配給株式會社
　　東京都神田區淡路町二ノ九

發行所　農山漁村出版所
　　東京都牛込區津久戸町三十一
　　電話牛込（34）六九四八番
　　振替東京四四二六〇番
　　會員番號一二五〇一六號

（日本標準規格B列六號）

道民農活

不許複製

〔本製堂隆一〕

天谷虎之助編

現代農村の傑出人物

B6版三八〇頁 〒價一圓二十二錢

本書は高松宮家へ御進達申上げる當代農村第一人者の汗と涙の業績書の十年ぶりの公開。

我農生 山崎延吉著

昭和の義農

B6版三〇〇頁 〒價一圓二十二錢

古瀬傳藏編

指導錄成 **農村戰士報告書**（第一回發表）

B6版二八〇頁 〒價一圓十二錢

本書は全國の代表約精農家の貴き體驗記錄。

全國學農聯盟編 農林技師 多田稔著

稻田養鯉

B6版九十頁 〒價六十二錢

農山村の人達は保健上是非鯉を飼ひませう。

古瀬傳藏編

戰ふ農村婦人（報告書第一回發表）

B6版二八〇頁 〒價一圓三十二錢

本書は社會施設衣、食、住に關する貴き體驗記錄

横須賀海軍人事部推薦 津村敬行著

海は招く

B6版三二〇頁 價一圓八十五錢

社團法人農山漁村文化協會編 山崎延吉著

銃後青年戰士を慰ふ

B6版七〇頁 價三十八錢

農山漁村文化協會編

樂しい玩具の作り方

B6版八〇頁 價三十八錢

醫學博士 脇田政孝著

精神醫學とその治驗例

B6版三六〇頁 〒價一圓八十二錢

東京市牛込區津久戸町三一

農山漁村出版所

振替東京四四二六〇番

終